やうな蹉行を敢てする民族であることは、上來述べ來つた所を、彼れ是れ照らし合せて推測することが能きるのである。

第六篇　個人主義と事大主義との事

前篇に於て支那人が同情に薄く殘忍性に富むことを述べるとき、彼等の極端な個人主義や事大主義にも言及したから、今更ら之を繰返す迄もなからう。併しながら此等の點に關しては、多少重複に渉るが、別に幾らか餘分な說明を下すのが、本書の趣意にも副ふことだと考へられる。即ち本篇は前篇の補遺と看做して貰ひたい。

或は支那人が特に個人主義の民族だと云ふことに就て疑を挿さむ者があるかも知れぬ。其れは（一）支那人の一特徵たる家族制度、殊に大家族制度（二）同職業もしくは同鄕の者の團結（三）何等か特別な問題に對する協同動作などを見聞するから起る疑ひに外ならぬと察せられる。此等の事實を單に表面から觀るときは、成る程、彼等をば特に個人主義者呼はりするのは、當を得ないやうにも思はれるであらう。併しな

がら一歩立ち入つて考察するときは、其邊の疑惑は自づと氷解せられる。

支那人は如何にも家族制度を重んずる民族である。殊に大家族、即ち多人數より成る家族は彼等の特徴だとも謂へやう。勿論、何れの國たるを問はず、家族の大小は經濟狀態に因由するものであつて、農業時代には其れが大きく、商業時代に移るに隨ひ(換言すれば經濟狀態の發達に隨ひ)其れが小さくなるを普通とする。此普通の過程から見るときは、支那の大家族制は、理論としては異とするに足らぬやうであるが、併しながら支那の其れは、單に普通の例を以て推すことの能きない程に特異の習慣を成し、他の同程度の文化を有する民族よりも著しく超越して居る。之に關して極端な例を擧げると、宋の時代に會稽の喪承詢が十九代に亘つて同家族を繼續し、有名な陸象山が撫州金谿に家し累世義居した(『五雜俎』及び『鶴林玉露』)などの話もある位ゐだが斯樣な大家族を名譽としたことは、『義居』の『義』の字で現されて居る。又拆産(財産分配、分家)は必らずしも惡事ではないとしても、好ましからぬ事、少くも自慢に

ならぬ事と認めるは、支那人の常情であつて、彼國の小說中、不悌な弟が兄に拆産を迫る話などが、特に不悌な根性の引合ひに出されて居る。要するに彼等の家族制度が其特徴であることは、爭へない事實である。併しながら是れは支那の骨肉間の情愛格別に深厚な爲めだと解することが能きないのみならず、彼等の血緣に對する感情は、却て我國人などよりも冷淡であつて、其れが大家族群居の事實と相矛盾する爲め、深刻な家庭的悲劇を生ずるの原因となるとは、彼國の小說の筋などにも、少なからず現れて居る。然らば斯樣な民族に、何故大家族制度が特徴として存續するかと云へば、其れには支那が農業本位國だと云ふ普通の理由がある外に、彼等の通有せる慾深い心から各自個々の利害を打算した結果と、若干の產を起し得た者が其財產の分解散逸を恐れた結果とに外ならないのである。即ち左まで多くもない財產に衣食する家族は、兄弟幾人かに分家すると、銘々に分たれる財產は甚だ小さなものになる上に、住居を構へ生產に要する設備(農具牛馬など)を整へる等の負擔を生ずるけれども、之に反

して兄弟が親から遺された一つ家に共同の生活を營めば、生業上の費用が輕くて、比較的安樂にして行けると云ふ打算が第一で、第二には苦勞して築き上げた財産を、多勢の兒供に分けて了へば、折角の財産も詰らない程に小さなものになり、鄕黨に對する家の勢力も名譽も型なしになるから、自分の死後も、財産の分配を行はせず、兒供の内一人を家長にして他の兄弟を長く同居させ、財産に傷をつけないことにしたいとの希望から出た事實であつて、矢張り是れも被相續者たる親の打算である。斯樣に財産を分けぬ習慣が直ちに大家族群居の習慣となることは、固より當然の沙汰である。併し一方に於ては、形式的文飾的に支那人の道德律たるの觀を成せる儒敎の孝悌が、彼等をして虛榮的に所謂『義居』の眞似をさせる點のあることも亦看過せられないであらう。

同職業もしくは同鄕の者の團結とても、元來は個々の利害觀念から出發して居るもので、其點は支那人の地方部落の團結と同樣、斯くせざれば各自の生業（甚しい場合

は生命さへも）を防護することが能きないといふ據ろない事情に拘制せられて出來た習慣に過ぎないのである。廣大な支那の地域を東西南北と跋涉して轉運行販する商人は、銘々の身の上を顧みると心細いもので、故鄕が遠い上に交通の便が惡いから、旅先きで病氣になつたり、又は損失その他の災難に遭ふと、極端な窮地に陷らねばならぬ。其上に太平の時代でも、匪賊の難が畏ろしい上に、戰亂の世となると、什んな身の上になるかも知れない。斯樣な國では、個人主義で固まつた人間も、我身可愛さの餘りに、同職業又は同鄕間の相互扶助を必要と思ふに至るは蓋し當然な成行で、毫も異とするに足らない。支那人の個人主義を徹底的に代表した揚朱ですらも、『物我兼利』なる言葉の下に、己を利するが爲めには他を利することも必要だとして居る。同業同鄕の團結も、亦此意味のもので、畢竟支那に於ける好ましからぬ環境から餘儀なくされたネセッサリー イーヴィル（支那人の目から視ての）に外ならないのである。

特別な問題に對する協同動作も、人をして支那人の性格を誤解せしむる一原因であ

つて、殊に十餘年來續出した排貨運動や、次では罷市だとか罷工だとか、最近に至るまでの彼等の騒ぎは、如何にも其團結心の鞏固なことを示すやうだ。併しながら試みに思つても見るが可い、若しも支那人が、國家とか民族とかの大利害の爲めに協同一致する力の强い人間であるとすれば、什うして自國の國運を驅つて今日に至らしめたかを日清戰爭や北清事變の時代に於ける多數支那人が、自國の安危存亡に對して、什れだけの考を持て居たかを顧みると、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。最近に及んで大きに目が醒めたの、イヤ覺醒だ自覺だと、外間から囃し立てる者も多いが、其れは飛んだ買被りで、彼等の實狀は日清戰爭北清事變當時と五十步百步の違ひもない。固より彼等の中には眞實自覺も覺醒もした者が有らうが、其れは支那人全體から見れば、九牛の一毛にも足らないで、國耻を叫び國權回復を咆哮する者の殆んど全部は、彼等の芝居掛りを好む癖（第二篇にも述べた所）に加ふるに低級民族の通弊たる附和雷同性を以てし、更に爲めにする所ある內外人の敎唆煽動と運動費供給とを加味せられ、又

諸外國が近年に及んで、支那其他の弱小國に對する高壓手段を手痛ゆると共に、（大正十四年の騒ぎには）北京に於ける外交團の步調が甚だ不揃ひであつたと云ふ事實をも調合せられたものだと認めて、些かも差支へはないのである。

儒敎が形式的文飾的に支那人の道德律たるの觀を成せることは、前段にも一言したが、其れが唯形式的文飾的たるに止まることを見逃してはならぬ。古來兎も角も支那の人心を實際に支配した倫理的思想は、漢代の文獻に現はれてより今日に至るまで、堅く根を卸して居る道敎である。道敎に就ては、後篇『享樂』云々の條りでも、言及する積りであるが、其包含せる內容は、老莊の虛無主義、楊朱の自愛主義に、巫術陰陽道神仙術などゝ稱するものを混合した上に、佛敎の現世的部分をも包擁した特殊の宗敎である。此道敎が果して全然能動的に人心を指導し支配したのか、又は本來の民族性に順應して出來たものであるから勢力を得たのか、二者何れかは尙ほ疑問であるが、其れが人心支配の立場を占めて居ることだけは間違ない。何れにしても、支那人

の倫理的思想には、個人主義享樂主義打算主義を要素とする部分が甚だ多い。支那人に取りては、四書よりも歴朝大儒の著書よりも數層倍有難い『功過格』といふ道德の標準を示したものがある。是れは『太上感應篇』と云ふ道教の經典に含まれたもので、人間の善道二十四條、惡類百五十條を掲げ、善道に對しては『功』、惡類に對しては『過』を、其れ〳〵數字に示して居る。例へば『孝』は功八、『濟人之急』は功三、『受辱不怨』は功五、『暗侮君親』は過八、『虛誣詐僞』は過七、『殺人取財』は過七、『侵人所愛』は過三、『淫慾過度』は過四、『偏僧偏愛』は過三と云ふが如きもので、數字に依て功過の差引勘定が能き、死ぬるとき一生涯の決算報告を作つて、未來の應報を間違ひなしに受ける仕組になつて居る。即ち道德の標準其ものが數字的になつて居る一事こそ、彼等の打算主義を如實に證據立てるものである。

斯樣に打算的な支那人が、打算的に大家族制度を持續したとて、些かも不思議はあるまい。而も其大家族なるもの丶中に、一歩踏み込んで見ると、前篇にも述べた通り

妻と妾と、姑と媳と、嫂と弟媳と、又は伯叔父と甥姪となどの間に、殘酷な鬪爭が繰返され、妻は機を下りず嫂も爲めに炊がざる蘇秦の故事以上のことが、今日でも絶えず繰返されて居る。其邊の事實は表面の家族制度を全く裏切つて、個人主義の極致を見せたものである。左に掲ぐるは、同じ子でありながら、出世した者と出世せぬ者に對する親の感情に大きな相違があつて、同時に其嫁も亦差別的待遇を免れぬ話を述べたものである。

『鏡聽』（「聊齋志異」一節直譯）

益都の鄭氏、兄弟皆文學の士なり。大鄭（兄）早く名を知らる。父母嘗て之を過愛す。又子に因て並に其婦に及ぼす。二鄭（弟）は落拓して甚だ父母の懼ぶ所と爲らず。遂に次婦（弟の嫁）を惡んで齒禮せざるに至り、冷睽相形れて頗る芥蔕を存ず。次婦毎に謂へらく『二鄭も等しく男子のみ。何ぞ遂に能く妻子の爲めに氣を爭はざるや』と。遂に擯けて與に同宿せず。是に於て二弟感憤し勤心鋭思亦遂に名を知らる。父母稍や之を優顧す。（中略）時に暑氣猶ほ盛なり。兩婦厨下に在り

て飯を炊き耕に餉る（野良仕事の辨當を造るの意）。其熱正に苦し。忽ち報騎あり。門に登りて大鄭の捷（文官試驗及第）を報ず。母、厨に入り、大婦（兄の嫁）を喚んで曰く、『大男式に中れり汝、凉々し去るべし』『熱い仕事を休んで凉まつしやい）と。次婦忿惻し、泣き且つ炊ぐ。俄にして又二鄭の捷を報ずる者あり。次婦力めて（力一ぱにい）餅杖を擲ちて起て曰く、『儂も也凉々し去らん』と（中略）異史氏曰く、『貧窮なれば則ち父母子とせずとは、以ある哉。庭幃の中、固より憤激の地に非ず。然るに二鄭の婦、男兒を激發す。亦怨望無賴の者と殊に同じからず。料るに杖を投じて起つは、眞に千古の快事なり』

同じ子でありながら、同じ子の嫁でありながら、出世すると出世しないとで、親から斯くまでも差別的に待遇するとは、扨ても驚き入つた話である。『貧窮なれは則ち父母子とせず、富貴なれば則ち親戚畏惧す』といふ蘇秦の言葉が今日まで諺として殘つて居るも、自から支那人の人情を窺はせると思ふ。親子の間でさへも恁般だとすれば況して親類や朋友の間に飜雲覆雨の多いことも無理はない。『夜譚隨錄』の中で『崔秀才』と題する短篇小說は、奉天の世家劉公が零落したとき、以前世話をしてやつた親戚朋友が恩を忘れ義に背いて、些しも同情を寄せず、何れへ向つて金錢の無心をしても一人として構ひ付ける者がないので、倩づく人情の輕薄を嘆じたが、軈て思ひ掛もない義俠者（主人公たる崔秀才で、實は狐の化けた者）の救を得て、全く家運を挽回したとき、冷淡極まる連中が、打つて變つて、諛ねり近づいて來るのを見て、益々人情の淺猿しさに呆れ返つたと云ふ筋を書いたものである。此中で、劉公が落魄のとき、靳公子といふ富豪へ無心狀を送つたに對して靳から寄越した返事の手紙は、人情の浮薄を徹底的に暴け出すと共に、支那人の辭令の雛型ともなるから、其まゝ寫し出すことにした。

『叨りに知己に在り。亟かに當に命の如くなるべし。奈んせん心、力と違ふを。君但勉めて尙志の士たれ。自ら暴棄すること無れ。又何ぞ貧賤を憂へんや。且つ天、劉君を生ず、必らず孫々たる者に非ざらん。君姑らく之を待て。大富貴の日あるを保せん。第義を好むこと弟の如き者が、

此危急の秋に値ひて、竟に良朋の困を坐視し、一援手救する能はざるは、殊に自ら愧づるに堪へたり。唯知己者、之を諒とせんのみ』

恁んな返事を貰つた、當人こそ好い面の皮である。

又支那人の弱を侮り强を畏るゝ根性から出た事大主義は、前篇にも述べた通りで、又餘りに明白な事實であるから、茲に細說する迄もないが、其最も顯著な例は、過去六七十年來、支那國そのものが外國に對した態度であらう。殊に鴉片戰爭の如きは、當初相手が只の商人だと見縊つて居た間は、馬鹿に威勢が好くて、莫大な鴉片の燒棄といふ寧ろ痛快な處置をも斷行したが、扨て戰爭になつて手酷い目に會はされるとなると、必要以上に恐れ入り、今日までも國の體面を沒却した屈辱（外國人の稅關支配の如し）を繼續して居るのである。

之に關して小說中の例を擧げると、隨分澤山あるが、其極端な見本は左の通りである。

市立米川図書館

る。

『覺禪禪』

（一節大意）

大盜賽崑崙は友人未央生から、權老寔の妻艶芳に戀着せることを打ち明けられ、同人を手引して首尾能く其思ひを遂げさせた。爾來男女の嬉曳は度重なつたが、賽崑崙は不義の相手が自分であるやうに態と隣近所へ見せ掛けた。それは自分が相手だと思へば、誰しも威勢に惧れて、手出しの能きないことを豫期したからである。斯くて未央生と艶芳との情交は日を經るにつれて深くなり勝つたとき、夫の權老寔が旅先から歸宅したが、妻の艶芳の樣子の變つて居るに驚いて、近所の友達に不在中のことを聞合せたら、艶芳に奸夫の出來て居ることが判つた。併し其奸夫なる者が泥棒の賽崑崙であることを聞かされて、大きに腹を立てはしたが、賽崑崙の兇惡極まる平生から見れば、怒じい間男呼はりして騷ぎ立てると、却つて此上にも酷い目に會はされる恐れがあらうと友達から忠告せられて、軈て憤怒が變じて恐怖となつた。扨て什うしたら可からうかと段々相談を遂げた末、妻を奪はれた損害を塡め合せると共に、身の安全を保つ爲めには、此方から進んで

艶芳を賽崑崙へ賣付けて若干かの金に換えるのが、最上の策であらうと一決し、直ぐさま人を介して此儀を賽崑崙に申込んだ。其口上に此頃權老寔が商賣に失敗して活計に窮し、妻を賣らうと云ふ場合貴下の義俠心に御縋りしたいとのことであつた。未央生艶芳とを一緒にして遣りたいと工夫を廻らして居た賽崑崙は、此申込をば思ふ坪と打喜び、艶芳をば我妾に買取る振して身代金百二十兩を支拂つた。

第七篇　過度の儉約と不正なる金錢慾との事

好い方面から見ると節儉質素、惡い方面から觀ると吝嗇貪慾は、支那人の特徴で、彼等が猶太人と一對の民族にされて居る所以である。筆者は之に關して、先づ好い方面を敍述し、然る後、惡い方面に移らうと思ふ。尤も好い方面といつても、其中には常識から觀て、多少排斥すべきものを含むことを斷はつて置く。

支那人の儉約は、衣食住三者の内で、特に食事の上に現はれるものが多い。元來筆者は、支那料理が、世界中の料理で、最も進歩したものであらうといふ想像を懷いて居る。其料理の種類の多いこと、手數のかゝることは、實に驚くべきものがある。西洋の料理も、却々種類が多いが、西洋料理は、假令ひ名稱が違つても、實質に於て相類似せるものが多い。甚しきは或藥味を加へると否とによつて、別の名稱になるものも

ある。之を支那料理が、名稱を異にするに隨つて、正しく實質を異にするとは、比較にならぬのである。又實際、支那料理には、手數のかゝる點に於て、洋食の比でないものがある。一晝夜も連續して煮なければならぬ物もあるさうだ。又原料の上に於ても、非常の注意を施すことがある。例へば極めて小なる胡瓜を作る爲め、畑で豌豆と胡瓜とを入交りにして育て、双方の蔓を半ば殺いで緊着かせ、丁度接木の樣にし、其後で豌豆の蔓の上部と胡瓜の根とを除き去る法がある。斯うすると、小指くらゐな胡瓜が出來る。其れを小蝦と一所に、鹽漬にしたものを「滷蝦油黄瓜」と名づける。(但し此料理は、お茶漬の香の物くらゐなもので、重立つた料理ではない。其れですらも原料に斯程の手數を掛けるとすれば、以て他を類推することが能きやう。)要するに支那料理なるものは、却々贅澤なものではあるが、此等は中流以上の食事の場合に限られ、中流以下になると、實に質素なものである。而かも彼等は、僅かの種類の原料を應用して、外國人が見ると驚くほど、巧みに食事を作るのである。ソシテ其原料の如

何なる部分をも、廢り物にせず、巧みに之を利用するので、益々料理のヴァラエチーが多くなるのである。或米國人が『米國で日々出來る食物原料の殘滓(ウエースト)で以て、六千萬の亞細亞人に、比較的上等な食事を與へることが能きる』と曰つたのは、支那人の食事を見ると、萬更らの法螺でないと思はれる。又支那人の肉食の原料の範圍が弘いことは、多分世界一であらう。彼等は馬、騾馬、犬、猫及び駱駝をも、總て胃の腑の中へ收める。甚しいのは、鼠さへも、天麩羅にして失敬するのである。水滸傳など讀んでも、時々狗の肉の御馳走に出喰はす。花和尚魯智深が、五臺山の近所の酒屋で、狗の肉を煮て居る臭ひを嗅付け、出家の身でありながら、亭主を嚇し付けて、鍋中の肉を平らげて了ふ所など、讀者の興味を牽く部分である。『羊頭を懸けて狗肉を賣る』といふ支那の言葉は、滿更ら喰へない物を喰はせる意味でないことが、是等の點から看ても判るのである。加之、彼等が肉食をする場合には、其動物が如何して死んだかに就て寸毫も頓着をしない。恐ろしい疫病で斃れた奴でも、颯々と平げて仕舞ひ、臓腑も

百尋腸も、グッ〳〵煮込みにして、舌鼓みを打つのである。

食物の原料ばかりでなく、其食物を煮燒きする燃料や、鍋類などにも、中以下に屬する支那人の儉約質素が現はれて居る。即ち燃料としての炭薪は、彼等に取りて寧ろ贅澤物である。大概な場合は、落葉や枯枝で間に合せる、其れで、暇さへあれば、落葉枯枝を獵つて、萬遍なく搔集め、大事さうに貯蓄する。用のない兒供に取つては、是れが日々の役目である。併し落葉枯枝などを燃しても、火力が弱く、火持ちが短いから、其補ひをつける爲め、鍋類をば、極めて薄く造つてある。持扱ひに、餘程の注意を要するほど、薄くしてある。其れで火の透りも早く、落葉枯枝を燃すだけでも、普通の場合に於ける炭薪と同じやうな結果を收めるのである。

食事のこと丈けでも、斯樣な有樣であるから、衣類や住居などのことも、推して知るべしである。其邊の話は、一先づ省略して置くが、玆に支那人の節儉を示すに、著しい例として見るべきは、品物の賣買である。所謂『錙銖の利を爭ふ』とは、彼等の

間に於て、始めて實現される言葉のやうに思はれる。一文二文の相違の爲めに、時間を惜まず推問答するは、珍らしくもない。燐寸一箱を求めるにも、箱をあけて、一本一本勘定し、ドノ箱の燐寸が、一番多いかを、比べて見る程である。紙卷煙草の一本買ひも普通である。

殊に支那の下等社會の者が、食事の費用を節する爲め、極端まで饑餓を耐へる一事には、驚かれるものがある。ドクトル　ヘンリーの『十字架と龍』なる書に擧げた例を見ると、著者は或日、三人の苦力を傭ひ、廣東から二十三哩を距てた土地へ、輿で旅行した。其時間は五時間かゝつたが、先方へ着いたとき、苦力は未だ朝餐前であつた。然るに彼等は、到着地で朝餐を取らうとはせず、其まゝ廣東へ歸つて往つた。其れは此地と廣東とで、飯代に五錢の相違がある爲めであつたと云ふことだ。五錢の違ひの爲めに、空腹をかゝへて、往復四十六哩もテクルとは、人間業とは思はれないではないか。

要するに、中以下の支那人の儉約の仕方には、日本人の想像の及ばぬ所がある。斯様な儉約をすればこそ、一代の間に、文なしからの百萬長者も出來るのである。イクラ稼いでも、人並の生活をしたいといふ心があつては、左樣な異數の出世は迚も望まれない。即ち節儉質素は、彼等の最大長所といはねばならぬ。此點は薄志弱行な日本人などの龜鑑とせねばならぬ所だと思ふのである。併しながら節儉質素を守るといつても、一文吝みの百損は戒めねばならぬ。支那人の間にも、此弊の存することは事實である。前述の如く、食物の品質を選ばず、衞生上に何の注意もしない事などは、日本人の眞似るべきことでない。又支那人が、不潔を構はず、衣類の洗濯をしないのは一つは其の早く振じるのを憂へる爲めでもあらうが、斯樣な儉約は、儉約の部類には入れられない。其價値は、前掲の鼠の天麩羅以上に出でないのみか、其害毒も、亦之に劣らないのである。

偖て支那人の儉約質素は、凡そ右の如きものであるが、其儉約質素より、更に進んで吝嗇貪慾の境に入ると、彼等の特徴は、人をして厭惡の感に堪へざらしむるものがある。先づ支那の官吏より云へば、彼等は徹頭徹尾、賄賂で生活する人間である。形式から見れば、支那には唐時代以來、科擧の制が千餘年間繼續し今日に於ても、新式の登用試驗の制度があるから、官吏の任用は、大に公平であるやうだが、實は矢張り賄賂の力が一番偉らい。我國でも、今日隨分とも其邊に類似のことがあるけれども、支那では、其れが特別に甚だしい。假令ひ科擧とか試驗とかに及第しても、賄賂の大試驗を通過しない限り、到底高等官の地位に就くことが出來ない。況して官途に就いた後、鰻上りに昇進しやうとするには、是非とも其都度ごとに、賄賂の關門を潛らねばならぬ。失策をして、地位を失はんとする場合に於ても、賄賂が矢張り賴もしい庇護者になるのである。近い頃、有名な賄賂事件は、清朝の末造に當り、段芝貴が天津の名妓翠華を落籍させて、慶親王の子たる載振貝子に獻上したことが、世間の評判となり、岑春煊の腰押しで、江春霖といふ御史の彈劾が持上がつた一條である。所が御史

も亦他の依囑を受けて人を彈劾するときには、彈劾料として賄賂を取るのが常例であつて、江春霖の場合も矢張り同樣であつたとは、呆れさせる話である。併しながら斯樣なことは、支那では日常茶飯事に過ぎないのみか、共和國になつて以來、それが却つて太甚きを加へて來たから、恐らくば將來も可なり久しい間繼續することであらう（極めて有力でそして嚴正なる政治家が現れて、根本的に官紀を振肅せざる限り）斯樣に官吏の間に、賄賂が行はれるからには、彼等が外間から賄賂を貪ぼることは、言ふ迄もない。外國の商人から、兵器などを賣込むにしても、品質の好くて價格の廉いことなどは、寧ろ第二義に屬し、其筋へのコンミッションを成るべく多くすることが第一義に爲つて居る。久しい間此呼吸を最も好く心得て居たのは、歐洲大戰前までの獨逸人で、我商人などは、割合ひに眞面目な爲め、往々賣込みの競爭に、鼻毛を拔かれたことがある。又地方官が俸給よりも賄賂をば、重なる收入として居ることは、公然の秘密である。第一、裁判が賄賂に支配されることは、著しいものであるが、其賄

賂の中で、最も質の惡いのは、此方から賄賂を督促し誅求するの一事で、殊に富豪などに對しては、何かの口實を設けては、賄賂を絞りにかゝる。其富豪が、原被兩造、何れかの立場に立つたとなると、地方官は、之を何より結構な獲物と心得るのである其れで支那の小說には、大富豪が、訴訟事件の爲め、家產を蕩盡するの例が、しば〳〵現はれて居る。實に訴訟は、中流以上の人に取りて、此上もない厄難であるから能きる限り訴訟を避けるの風を成して居るが、其反對に、富豪から金を强請る種に、訴訟を起しかける無賴漢も却々多いさうである。而かも、地方官から賄賂を誅求されるは獨り富豪ばかりでなく、貧乏人も亦、身分不相當の賄賂を促られて、難義をすることが少くない。左に擧ぐるは、其一例である。

『槐西雜誌』（一節大意）

或る地方官が、役所で、其收入に係る現金を取調べて居たとき、赤い糸を通した錢の束を發見した。是れは喜錢といつて、婚姻か或は妾を抱へるとき、結納の一種として、男の方から女の方

へ遣はすものである。其喜錢の形のまゝ、即ち赤い糸を通したまゝで、役所へ金を收める事は、甚だ異様な譯けであると心付き、段々と、納入者を取調べたところ、其仔細が判明した。元來此地方では、行倒れとか變死人とかゞ發見されると、其場所に一番近い家の主人が、屍體の取片付に關する費用を負擔せねばならぬのみか、地方の役所や、之に關係した小役人などへも、少なからぬ金を差出さねばならないと云ふ習慣である。然るに其頃會ま水死人があつて、其場所に一番近い家は、至極の貧乏人であつたから、忽ち右の費用に窮し、據ろなく、家の娘を、或大家へ妾奉公に出し、其身代を得て、役所への上納金其他に使用したものであることが、判明したので、右の地方官は大に嗟嘆して、其金を當人に下渡すと共に、小役人の貪ぼつた賄賂をも、返させようとしたが、最早や酒色に使つて了つた後だから、已むを得ず、自ら其全額を辨償し、漸くにして娘の奉公を中止させた。

官吏が賄賂を促る事情に就ては、尙ほ言ふべきことが澤山あるけれども、煩を厭ひて是だけに止めて置かう。要するに、支那人の金錢慾の强いことは、賄賂の一條だけ

で之を察するに餘あるが、其以外にも身分の上下を問はず、資産の大小を問はず、金持でも貧乏人でも、金を欲しがることは際限がない。之が爲めには、如何なる屈辱をも甘んじ、如何なる不德義をも罪惡をも敢てする者が、却々多い。其極端なる例を小說に求めると、『金瓶梅』に現はれたる西門慶の一代の行跡である。彼は宋の徽宗皇帝の御宇に、山東省清河縣で、藥種問屋を營んだ富豪であつたにも拘らず、有るが上にも金が欲しくて、種々の手段の下に、不正な金儲けをした。尤も彼は、金儲け許りでなく、女の方にかけても、非常の好者で、之れが爲めに、色々の罪を造つたが、併しながら、漁色をする間にも、常に射利の念を失はず、美人を得ると同時に、其美人に附帶した財産に目を着けるといふ。極端な色魔であつた。彼が澤山ある妾の中で、第一位の妾とした李嬌兒は元來藝妓ではあつたが、三千兩の金を持つて居るのを覗つて、色と慾とで手に入れた者である。又第二位の妾たりし卓二姐が死んだとき、直ぐさま其の後釜に入れた孟三兒は、美人は美人だが、金持の若後家で、多分の持參のあるの

を見込んだ者である。又西門慶の妾として、潘金蓮と對抗した李瓶兒（金瓶梅中第二の女主人公）は、西門慶の親友たる花子虛の妻であつたが、當人の身に着いた少からぬ財産があるので、西門慶は是れ亦色と慾とで、手に入れやうと掛り、其手段として花子虛を誘つて、女道樂に身を持崩させ、夫婦の仲を離間して、遂に機會を窺ひ、李瓶兒と奸通し、花子虛の死後、女と金とを、旨ま〳〵と奪ひ取つたのである。此内、孟三兒を抱へるとき、媒介した薛嫂兒といふ女から、三兒の財産のことを聽取る條を直譯すると左の通りである。

『薛媒婆說娶孟三兒』　（『金瓶梅』一節直譯）

薛嫂道く、這位の娘子は說き起し來らば、儞老人家も也た知道せん。就ち是れ、南門外の布を販ぐ楊家の正頭娘子にして、手裏に一分の好錢あり。南京の拔步床、也た兩張あり、四季の衣服手を揷み下さゞるもの（未だ手を通さぬもの）也た四五隻廂子あり。金鐲銀釧は說くを消ひず。手把の現銀子也た上千兩（千兩以上）あり。好き三梭布（織物の名）也た三二百箇あり。

妻を娶るに當つて、仲人から斯樣に、女の持物の棚卸しを聽かされるのは、我々日本人に取りては、面白くないことである（只妻の持參金を目當てにする如き、特殊の貧的兼卑劣漢は別問題だ）。況んや妾を抱へる場合に、斯樣な話が始まるなど、思ひも寄らぬことで、其れでは寧ろ野郎の方が、男妾に奉公する場合としか思はれない。然るに西門慶は、富豪の身を以て妾の身に着いた金品を、零細な點まで話させて、之を興あり氣に、一々聽き取るとは、誠に氣の知れぬ話のやうではあるが、顧みれば、今日の支那にも、尙ほ幾多の西門慶があるかも知れないのである。

更に『金瓶梅』の一書が、如何に西門慶の生涯を描き出せるやは、卷頭に說く所の左の一節によりて、充分に解釋されて居る。又此一節は、單り西門慶の生涯を解釋したのみではなく、或は多數支那人の人生觀を表現したものとも思はれるのである。

單に道ふ、世上の人、營々逐々急々巴々、七情六慾の關頭より跳り出でず、酒色財氣の圈子を

打ち破らず、到頭來、同じく盡くるに歸すれば、甚の要緊をか着くると。是れ此くの如く說くと雖も、只這酒色財氣四件の中、惟財色の二者ありて、更に利害を爲す。怎でか他の利害を見得るや。假如へば一箇の人那の窮苦的田地に到了し、無限の凄涼を受け盡し、無端の懊惱を耐へ盡し晩來、米甕を模一模すれば隔宿の炊なきに苦み、早起、厨前を看一看すれば、半星の烟火なきを愧ち、妻子飢寒、一身凍餒、就ち是れ那の粥飯すら、尙ほ且つ艱難す、那んぞ餘錢を討めて、酒を沽はん。更に一種恨むべき處あり。親朋白眼、面目寒酸、便ち是れ凌雲の志氣も、分外に消磨す。怎でか能く勾りて人と氣を爭はん。那の錢ある時節に到り得ば、金を揮ひて笑を買ひ、一擲巨萬、酒を飲まんと思へば、眞箇瓊漿玉液、那の琥珀盃の流るゝを數へず。氣を鬪はさんと欲すれば、錢神に通ず可し。果然是れ頤指氣使。趨炎的のもの、背を壓し肩を挨ち、附勢的のもの、癰を吮ひ痔を舐む。眞に所謂勢を得れば肩を疊みて來り、勢を失へば臂を掉ひて去るもの。古今炎涼の惡態、此れより甚しき者ある莫し。這の兩等の人、豈是れ那の財的害處を受けざらんや。所以に、財を沒有了へば、便ち色酒氣三者を沒有了ふ。豈是れ財的害處、更らに色酒氣三者よりも甚しからずや。有的の人、是の財的害處を認めずして、財的利處のみ誤認了し、以爲らく、財を

有了ば便ち爲さんと欲する所を爲し、一世の榮華を享受し、一生の聲勢を倚仗すべしと爲す。說かず親戚朋友多く來り奉承するを、就ち是れ公卿宰相も、也た結納すべしと。只利ありて圖るべきを要す。管せず他の命を害し生に殃ひするを。得せしむるも、得ざらしむるも、一齊に幹去し、只財の能く手に到るを要し、也た親戚の名分、朋友の交情を顧みず。起初時は、偶然湊功するに過ぎず。幾個の臭銅錢を弄到了すれば、後來便はち愈よ想ひて愈よ奇。陽はに選色の名を下し、陰かに斂財の術を行ひ、專ぱら婦人の面上に在りて、千方百計、誘騙家を興し、後來に到つて、事機敗露し、甚しきは鬥狠殺傷、性命保たず、這樣の人、或は其れ那の色的害處を受くと謂ふも其實他は只是れ那の財的害處を受くるものなり。

日本人は、『色と慾』といつて、色を先きにし、慾を後にし、支那人は『財色』といつて、財を上にし、色を下にする。此言葉の遣ひ方の相違にも、幾分の意味が含まれて居るやうに思はれる。『金瓶梅』卷頭の財色論も强ぶち一場の戯言として看過し難いのである。

『掃溜めと金とは、溜るほど穢い』との俗諺もある通り、日本でも、金持が却つて貧乏人よりも錢離れの惡い例が多いけれども、支那人は、其點に於て、一層甚だしいやうである。今も一つの極端な例を擧げると。

『人化鼠行竊』

（「新齊諧續集」一節大意）

王某なる觀察（官名）が、公用で長沙に赴き、邑令の官宅に宿つて居た。或晩、氣逆せがして寢られず、三更の頃まで、目を醒して居たところ、仰塵の邊に何物かゞ居て、物を嚙む音が烈しいので、帳を披いて、目をつけて居ると、忽ち二尺ほどの鼠が飛下りて來て、人のやうに立つて歩きだした。王は驚いて側なる印匣を取て、投付けると、匣が破れ、印が出て、其鼠に中り、鼠は床へ倒れると、皮が剝れて赤裸の男になつた。王はます〳〵驚ろき、人を呼んで捕へさせ、段々と鞫問をすると、此男は附近で有數な金持である。其金持に爲つた原因は、幼少のとき、或異人から、鼠に化ける術を敎へられ、之を濫用しては盜を行ひ、今日までに盜み得た金は、數十餘萬を下らない。其れで家產は大に裕かとなり、五人の子を設けて、其內三人は、既に立派な官吏に

爲つて居る。尙ほ他の二人の子の爲めにも、金を出して、官を買つて遣らうと思つたが、持合せの金では少し不足であるから、其足前を造る爲め、邑令の官宅に忍び入つた者だと云ふことである。（印の爲めに術が破れたとしてあるは、支那では、官印を非常に神聖なものとして居るからである）。

此等は、只の篤棒な小人のことであるが、左に揭ぐる『水滸傳』の托天王晁蓋の話は、當人が金持である上に、立派な人物として名望を收めて居るにも拘らず、盜賊を敢てして、終に梁山泊の首領になつた譯けて、我々日本人には、其心理狀態が如何にも解し難いのである。

『吳用智取生辰綱』

（「水滸傳」一節大意）

托天王の綽號を負へる晁蓋は、山東濟州鄆城縣の豪族で、平生義に仗り財を吝まず、專ら天下の豪傑と交りを結ぶので、其德を慕ひて訪ね來る者が、甚だ多かつた。然るに或日、赤髮鬼劉唐

なる者、巡捕の爲めに捕へられたのを助けて遣ると、此劉唐は、豫てより晁蓋の盛名を仰慕し、今度天より賜へる一套の富貴を土産物として、晁蓋を訪ねやうとした其途中で、巡捕の怪しみを受けて捕へられたものだと云ふことだ。天より賜はる一套の富貴とは、何であるかと問ふと、此頃北京大名府の梁中書が、其丈人たる蔡大師の誕辰を祝する爲め、十萬貫の賀儀を贈ることに爲り、其賀儀は多勢の吏人に警衛させて、蔡大師の在住せる東京へ輸送する筈である。而して輸送の行列は、近々鄆城縣を經由する筈だから、何とか手段を設けて、之を奪ひ取りたいと思ふ。一套の富貴なるもの、即ち是れであると道ふのであつた。此説明を聽いた晁蓋は、壯なる哉々々々と賞贊して、一議にも及ばず、同意を表し、其友人たる智多星吳用に、掠奪の手段を考へさせ梁山泊の邊りなる石碣村に住へる三人兄弟の漁人立地太藏阮小二、短命二郎阮小五及び活閻羅阮小七をも、夥伴に引入れ、更に道士として幻術に巧なる入雲龍公孫勝をも加擔させ、又白日鼠白勝なる無賴漢をも、手先きに使ひ、いよ〳〵賀儀輸送の行列が、鄆城縣に近き黃泥岡に差掛るを待受け、白勝を白酒賣に扮たせ、他の諸人は棗商人の一行の如く裝ひ、行列の人々が、暑さと疲れに堪へず、黃泥岡の上で憩らつて居る其傍に、荷物を卸して休息し、折柄、白酒の桶を擔つて

來た白勝を呼留めて、其白酒を、左も旨さうに飲むので、行列の人々も之に釣込まれ、爭ふて白酒を飲んだ。其際白勝は、人々の眼を掠めて、蒙汗藥を酒の中へ入れ、行列の人々一同、之に中毒して倒れるのを見濟まして、彼の十萬貫の價ある金銀珠玉の賀儀を、一つ殘さず奪ひ取つた。

是れが抑も梁山泊の物語りの發端になるのである。前申す通り、晁蓋の身分や性格とは如何にも一致しない所業で、吾々には甚だ合點のいかぬ心理狀態ではあるが、支那人の金錢慾が特別に强いことを顧みるときは、或は左まで不思議のことでないかも知れぬ。

支那の第二革命の失敗した原因は、一にして足りないが、併しながら其重なる原因は袁世凱の政府が、五國借款の現金を受取り、之を以て、盛んに南方の諸將士を、買收した一事に在る。鐵火に訴へても、完全なる民主々義を打立てやうとした先生方が、無造作に初志を翻へして、銃彈に非ず、砲彈に非ず、白磷々たる銀彈の雨注に、脆く

も降參し退參したのは、如何にも意氣地がなさ過ぎて、其當時、南方派に同情した我國人の、切齒措く能はざる所であつたが、是れも支那人の特質を充分に解しなかつた誤りたるに過ぎない。又支那の督軍とか、督辨とか、巡閲使とか、保安總司令とかの軍閥連が蓄財に巧みであつて、其資產が國の財政と全く反比例を成すことは、寧ろ顯著に過ぎた事實である。

斯樣な次第であるから、支那の商人等の慾の皮が、法外に突張つて、錙銖の利を爭ふは愚か、巧算剝削、あらゆる手段を廻らして、他を損じ己れを利さうとする狀況は殆んど之を筆にするの必要はあるまいが、併しながら特に記して置かねばならぬのは所謂支那人の商業上の信用である。彼等の間に於ける信用制度は、確かに發達して居る。外國の商人に對しても、此人ならばと見込を付けると、取引上に非常の信用を置いて疑はない。其邊は、我商人などの、コセ〳〵した態度とは、雲泥の相違であるが只彼等の信用制度の保たれるのは、彼等が無事に其業務を繼續する間だけのことで、

一旦彼等の或者が破產の境遇に陷ると爲ると、平生の信用を濫用して、極端に不信用な所行を敢てする。即ち閉店に先ち、債權を極力行使して、集められ丈けの金を集めると同時に、信用の惰力の効めがある限り、借りられる丈けの金を借り込み、取引先の不意に乘じて、突然姿を晦すのである。其例は、支那の有數な商人であつた者にも、見受けられたから、恐らくは、同國では普通のことであらう。要するに彼等の信用制度は、必らずしも商業道德の發達したものとは申されない。畢竟利害の念が深く、打算的に仕事をして行く風習から起つたもので、自分の都合の好い時だけ、正直に其信用制度を守るものに過ぎないと認められるのである。

第八篇　虚禮に泥み虚文に流るゝ事

支那は『禮』の國である。而かもその『禮』なるものは周禮儀禮等に徴するも、古來頗る廣い意味に用ひられた言葉であることが判る。獨り冠婚葬祭進退應酬の規則たるものを禮と稱するのみならず。國家の制度典章も禮である。孝悌忠信を行ふの道も禮である。家族制度も禮である。要するに禮は、支那の國家社會を固むるのコンクリートであると共に、支那の文明を形成せる最大要素とも云ふべきものである。但し『禮』は、斯樣に廣い意味を持つては居るが、普通の場合に於ては、主として行儀作法のことである。即ち主として行儀作法を意味する『禮』が、聖人の遺法として傳はつた以上、支那人が特に行儀作用に注意するも、怪しむに足りない筈である。併しながら支那人は先天的に强者を畏怖し、强者に阿附し、從順恭敬、其度を過ぐる國民であ

るから、主として此點よりして、特に行儀作法に注意するとに爲つたのであらう。又支那の社會は、實際に弱肉强食の狀態を呈し、人權の護持は、到底期待せられない。一旦兵亂が起るとか、然らざるも、亂暴な官吏や豪族に遭ふと、身命財產の安全を保障することが能きない。『强梁世界黑白なし』との言葉もある如く、誠に不安心極まる有樣であるから、自衛の手段として、力の及ぶ限り、强者の意を迎へ、其歡心を結んで置く必要がある。假令ひ先天的に、强者を畏怖し、之に阿附するの國民でなくとも實際の必要上、斯くせねばならぬ譯である。是れも亦特に行儀作法に注意することに爲つた原因でがなあらう。

斯樣な譯けだから、日本人などは、支那人中の何人に會つても、不快の感を起し得ない。否な少なからぬ愉快を禁じ得ないほどに、手厚い禮儀と、お世辭とを受けるのである。官吏は官吏、商人は商人と、其れ〳〵に禮儀の仕方と、お世辭の並べ方に品はあつても、何れも痒い所に手の屆く歎待をするので、從來日本では、餘り人に持て

なかつた輩でも、支那人に出遇つてからは、急に自分が偉くなつたやうな氣になり、好い心待に納まることがある。又天狗は何れの方面にも多いが、就中支那人に接觸せる所謂支那通の間に、其れが特別多いのも、相手の爲めに、ッヒ天狗癖を馴致されるのかも知れないのである。

支那人の禮儀作法は、確かに其長所である。禮儀作法は、文明の一要素とすれば、此點に於て支那人は、日本人よりも文明人だと申さねばならぬ。實は日本人が、世界中で一番禮儀作法に疎そかな人間だと思はれる。勿論日本人にも、隨分お世辭に老けた者もあれば、坐作進退に注意する者もあるが、其れは直接の利害關係ある目上の人に對する場合に限られるものが多い。禮儀としての禮儀でなくして、直接に何等かの利益を得る爲めの掛引たるに過ぎないものが多い。其れであるから、日本人の禮儀やお世辭には、故ざと作り付けた感じのする點がある。ドウしても斧鑿の痕が見える。支那人の應對進退の如く、(內心は兎も角も)渾然として毫も作爲する所なきが如く衷

心より溢れ出る溫情掬すべきものある樣に見せかける手際には、及びも付かないのである。實に此點に於ける支那人の手際は、鮮やかなもので、『天衣無縫』とも喩ふべき程である。是れと云ふも、畢竟彼等が先天的後天的に、行儀作法應對辭令に巧みな結果と思はれるのである。

即ち『禮』は支那人の長所である。ソシテ前述の如く支那の『禮』は單に行儀作法應對辭令のみに限られず。國家の制度典章も、孝悌忠信を行ふの道も、家族制度も、悉く引括めて『禮』の一字に歸着せしめて居る。而かも是れは形式上名義上のことのみに止まらず、事實上にも此等各方面の關係が、割合ひに密接になつて居る。殊に禮と道德並びに家族制度との關係は、寧ろ相混同して、一體に爲つて居る。即ち子にして父に孝ならざる者、妻にして夫に順ならざる者等、何れも禮を知らざる者と認められる。要するに一も禮、二も禮、禮なければ。支那の國家社會の組織は、忽ち崩壞し去るが如き觀がある。少くとも、支那人自らは、古來此信念を固く持して居るやうに見

られるのである。

併しながら、禮も厚きに過ぐるときは、縟禮となり、虛禮となる。支那人の眼から看ると、禮に疎そかな日本人などは、如何にも卑しく醜く見へるであらう、沐猴にして冠する者のやうに見へるであらうが、其沐猴たる日本人の眼から看ると、彼等は徒らに無意味な禮儀と、お世辭のみに屈托し、根本的の誠意誠心を、度外に付する者のやうに見へて、甚だ苦々しく思はれることが無いでもない。又縟禮虛禮は、人の精神を麻痺せしめて、土偶の如くならしめ、虛名を去つて實功を收むること能はず、事物の本末輕重を辨別して取捨宜しきに和ふこと能はざるの憂がある。此點に於て、頗る興味ある一例は、史記の匈奴傳に見へた中行說と漢使との問答である。中行說は元來が漢人で、匈奴の臣となつた者だが、漢の使が匈奴の國へ來たとき、漢と匈奴との風俗の優劣に就て爭論した其問答が是れである。文中、中行說が匈奴の風俗を誇稱した點は、一々當を得たものとは思はれないけれども、漢の所謂禮儀の俗を痛罵した

所に、面白味がある而も所謂因襲的道德に反抗する我國現代の新らしがり屋に取つては、知己の言とも云ふべきものであるから、小說ではないが特に玆に譯出する。

漢使或は言て曰く『匈奴の俗、老を賤しむ』と。中行說、漢使を窮りて曰く『而漢の俗、屯戍軍に從ひ當に發すべき者、其老親、豈に自ら溫厚肥美を脫し、以て飮食を行戍に齎送せざる有らんや』と。漢使曰く『然り』と、中行說曰く『匈奴、明かに戰攻を以て事と爲す。其老弱は鬪ふ能はず。故に其肥美を以て、壯健者に飯食せしむ。蓋し以て自ら守衛を爲すなり。斯くの如くんば父子各〻久しく相保つを得ん。何を以て、匈奴老を輕んずと言ふや』と。漢使曰く『匈奴の父子乃ち穹廬を同うして臥し、父死すれば、其後母を妻とし、兄弟死すれば、其妻を取りて之を妻とす。冠帶の俗闕庭の禮なし』と。中行說曰く『匈奴の俗、人は畜肉を食ひ、其汁を飮み、其皮を衣、畜は草を食ひ、水を飮み、時に隨がひて轉移す。故に其れ急あれば、則ち人騎射を習ひ、寬かなれば則ち人無事を樂む。其約束輕く、行ひ易きなり。君臣簡易、一國の政、猶ほ一身の如きなり。父子兄弟死するや、其妻を取りて之を妻とするは、種族の失はるゝを惡むなり。故に匈奴は、亂ると雖も、必らず宗種を立つ。今中國、詳に其父兄の妻を取らずと雖も、親屬ます〳〵疎なれば

則ち相殺し、乃ち姓を易ゆるに至る。皆此類に從ふなり。且つ禮儀の儆は、上下交も怨望し、室屋の極は、生力必らず屈す。其れ耕桑を力めて、以て衣食を求め、城郭を築いて、以て備ふ。故に其民急なれば、則ち戰功を習はず、緩なれば則ち作業に罷る。嗟土室の人、顧ふに多辯する無れ。喋々として佔々ならしむ。冠なるもの、固と何に當らんや』と。

虛禮の弊として、有名な話は、佛國の路易十六世の皇后マリー　アントアネットが、冬の日衣裳を易えるとき、襦を捧ぐる者、裳を捧ぐる者、帽を捧ぐる者、各々其職守がある爲め、着換えが鳥渡の間に合はないで、風邪をひいたといふ逸事であるが、支那にも斯樣なことは、隨分多いやうである。大官が煙草一服喫ふにも、煙管を捧ぐる者、煙草をつめる者、火を點ける者、それ〳〵に別々の人間が、役を勤めるので、却々に手間が掛る。其等は未だしものことで、所謂『禮』に拘泥するの餘り、却て甚だしい非禮敗德に陷る場合がないでもない。左の一篇の如きは、其一例である。

『灤陽續錄』　（一節大意）

二十歲にも足らずに、後家になつた美しい女があつた。三歲の子供を抱へて、是から先きの生活の道が立たないので親類共は、何所へか再緣させやうと評議して居た。然るに女の從兄の何某なるもの之を手に入れやうと謀つたが、支那では從兄妹同志の結婚は、所謂禮に背くので、或老嫗を間に立てゝ、其女に勸めるには『俺の方へ儞を貰ひたいとふが『禮に於て儞を娶るの理なし』だから、儞は表面は、何時までも後家を立通すことにして、ソシテ內々俺と關係をつけることにしては如何か、左すれば毎月、何がしかの金を贈いで、生計に困らぬやうにして遣らう』と申込ませた。女も終に之に應じ、親類や近所へは秘密に關係を結んだ。男の家と女の家とは、墻一つ隔てた背合せだから、親類も隣人も、其れとは一向心付かず。女は未だ幾らかの蓄へがあるので、寡暮しが能きるのたらうと、想像して居た。斯くて年月がたつて、子供が十七八にもなると、母親の不仕鱈が心外で堪らず、終に相手の男を刺殺した。其のときに及んでも、世間では事の顚末を知らず、金の貸借から起つたことだらうなど思つて居た。（下略）

從兄妹同志でも、表向き結婚して了へば、何事も起らずに濟んだ譯だのに、所謂禮に

拘束せられて、却て不道德に陷り、終に慘劇を演出するとは、馬鹿げた話と云はねばならない。

禮儀やお世辭も、度を過ぎると、マルデ嘘のつき合ひ、欺し合ひになつて仕舞ふ。『不敢當』の交換で、無駄な時間を費やすのも、弊害ではあるが、嘘のつき合ひ、欺し合ひに至つては、弊害が一層甚だしい。是に於て、支那人の縟禮虛禮の重なる部分を成せる、辭令應對並に文章の空疎、實なきことに就き、更に若干の說明を添へねばならぬ。

支那人の應酬辭令は、前述のとほり、實に至れり盡せりで、痒い所へ手の屆く遣り方ではあるが、併しながら、感覺の鈍くない者が、後で篤と考へて見ると、其用ひた言葉や動作が、餘り極端に走つて居たことに心づいて、馬鹿にされた感じが起ることになる。支那人は人に對して、『誠に濟みませんでした』くらゐな挨拶に、『死罪々々』といふ。如何に何んでも、死刑を願ひ出るとは、アンマリな話だ。スミス氏は之を

Imust be killedと譯して、其著書の讀者を吃驚させて居る。(日本にも『罪萬死に當る』とかいつて、一死もしなかつた政治家があるから、支那人ばかりを笑へまいが)

支那人のお世辭に就て、笑話を紹介しやう。

『笑府』

(一節直譯)

一士死して冥王に見ゆ。王忽ち一屁を撒つ。揖して辭を進めて曰く、『伏して惟んみるに、大王高く尊臀を聳へしめ、洪ひに寶屁を宣す。絲竹の音に依稀たり。麝蘭の氣に彷彿たり』と。王大に喜び午頭卒に命じ、別殿に引去りて、賜ふに御宴を以てす。中途に至り、士、午頭卒を顧みて謂つて曰く、『看る汝が兩角、彎々として、好し天邊の月に似たり。双目烱々として、渾て海外の星の如し』と。卒亦た喜ぶこと甚し。士の衣を扯いて曰く、『大王の御宴は尙ほ早し、先づ家下に在りて、箇の酒頭を喫し了つて去け』と。

扨て又支那人の習慣で、日本人などの、心得て置かねばならぬ事は、支那の紳士の

大切にして居る品物を、滅多に褒めてはならぬと云ふ一條である。支那の紳士は、慾の深い癖に、表面には、無慾恬澹を裝ふことが多いので、褒められた以上は、其品物を『お思召に叶ひますことなら、情願お持ち歸り下さい』とくる。勿論、其れを貰つてはならぬ。貰つたら大變な失體になるどころか、先方から孫子の末まで祟られるであらう。

ソレデ支那人は、他人に贈物でもする場合、內心では是れ丈けのものを贈らうと思ふよりも、遙か以上の贈物をする。時としては、自分の家に有合せの目星い品物を洗ひ浚ひ掻集めて、嫁入道具でも運ぶ樣な體裁で、大仕掛けに、其贈先きへ擔ぎ込むのである。トコロガ、貰ふ方の側でも、贈主の心持は（其國の習慣として）充分心得て居るから、擔ぎ込まれたものを百方辭退した揚句、其內の一部分、卽ち丁度、贈主が本當に贈らうとした位の程度のものを、旨く選り分けて、『其れなら、折角の思召しですから、是れ丈け頂戴して置くことに致しまして、其餘は謹んで御返し申上げます』と

百萬駄羅、御世辭の交換と、推問答とを仕合つて、ヤッと市が榮へ、贈物の大部分は又もやエッチラオッチラ、御苦勞樣にも、元の古巢へ逆戻りをさせるのが、支那に於て極めて普通のことである。（其れと知らずに、贈物の全部を、お辭義なしに頂戴して大縮尻をした日本人もあるとの事である。）

辭令應酬は右の通りとして、次には文章の一段に移らう。抑も支那は『禮』の國であると共に『文』の國である。實は文章は、支那人の最大長技で、此一點では、古往今來、何れの國民に對しても、一歩も引けをとらないのみか、寧ろ世界一の文章國民と稱しても不可なしといふ有樣である。西洋でも、希臘羅馬以來、今日に至るまで、幾多の卓越せる文宗詩聖を出しては居るが、公平に論ずると、支那人が此點に於ては一番偉いと思ふ。それも自分の淺學に原づく誤りであるかも知れぬが、其淺學の及ぶ限りでは確かに斯く信じて疑はないものである。其邊の說明は、此場合大した必要もないから、姑らく見合せることゝして、何れにしても、文章が支那人の長所たるに相

違ないことは、讀者に認めて貰はねばならぬ。

左に掲ぐるは、支那人の此長技を證據立てるに、適切な例證とは認めぬが、只或意味に於て、讀者に多少の興味を與へるものと信ずる。卽ち『不如歸』の漢譯の一節である。譯者は、福建省の林紓といふ人で、外國の小說を漢文に譯すること最も多く、此點で有名な人である。『不如歸』の原作者たる德富蘆花氏は、單に文章家としてのみでも、記者の夙に推服する方ではあるが、併しながら漢譯を見ると、什うやら譯文の方が原文よりも好いやうに思はれる。試みに左の一節を原文に比較して見られんことを希望する。

『鴨綠之戰』

（漢譯「不如歸」一節）

遠鏡を以て、四嚮するに、乃ち一物を見ず。因て左手を以て、欄干に倚りて望めば、萬聲都べて靜かに、中夜の風漸く凄涼を覺ゆ。月光いよ〳〵徹して、上下通明。面を迎ふる者は、皆黃海の白浪。隱約として島間樹石の影を見る。秋津洲前に在りて行く。銀河天にあり、一望極りなし

武男一たび怒りて、其母と別れしより、三月可り。三月中、經る所の變故、乃ち繁夥を極む。先きなるを、東學黨の亂と爲し、後なるを、艦隊佐世保を出つるの時と爲す。別を送るの軍樂、悲慘倫なし。宣戰以後に及んでは、武男の膽力、乃ち倍を加へ、威海衛兵を耀かすに當り、第一次の縱礮を爲しき。此れより後、軍中の事、驚奇百出、乃ち餘暇の思ひ家中に及ぶなし。然く身勞碌すと雖も、亦勞を言はず、謂へらく、正に此れを借りて、以て相思の日月を消せんと。且つ國家多難、但だ身を以て國に殉し、其無窮の長恨を掩蓋せんと圖る。此時死を視ること、直ちに灰塵に等しかりしに、今夕月に對して獨行し、期せずして、心緒復た生ず。（中略）長日晩中、夢に入るものは、但浪子の白衣を衣、別業に在りて、行を送るの狀を夢むのみ。又念ふ、三月中、浪子の消息を聞かず。詎猶ほ生くる耶。亦知る、必ずしも未だ嘗て死せざるを。果して死せば、吾心胡を以て初めより警兆なからんや。且つ吾二人、誓つて窀穸を同うす。果して事たる祥に非ざれば必らず、警兆の吾心に湧起するあらんと、方に手を以て、闌に倚るとき、心中苦りに浪子を憶ふて已まず。目中、月を見れば、浪子冉々として、月中より下るに似たり。既にして思ふ、明日必らず敵に遇はん。果して敵彈に中らしむれば、吾生已まんと。忽ち其母の、我を喪ひて以後、塊

然獨居するを思ひ、又其の父の生時、己れは身、江田島水師學校に在りしことを思ひ、既にして復た浪子を思ふ。

「浪子圖死」　（同　上）

此れ即はち當春、其夫と同じく坐して、而して生死を同うせんことを誓ひたるの地なりと。即はち其故夫の坐處に踞して坐するに、風景既に殊なり、心懷復た劣る。前には此れ春光明媚にして、海は乃ち鏡の如く平らかなりしに、今は則ち雲黑きこと、墨の如く、濤花撲て石磯に向ひ、其聲耳に震ふ。海上の飛鳥、盡く逝て、初より片帆なし。既に坐して、則ち武男の書を出す。書中草々數行と雖も、浪子より之を觀れば、之を萬言の書に較るも、夥しと爲す。中に一語あり、曰く、吾時として、刻として、浪子を思はざるはなしと。但だ此一言、已に以て已れの心を炸裂するに足る。期せず、天に向つて言つて曰く、此世界中、兒あり。而して天又胡を以て、兒を待つの酷なるや。兒は兒の夫を愛して、魂酥け骨化す。而して兒の夫も、兒を愛すること、亦深くして、情は揭ぐるが如くなるに、風箏中斷するは、是れ又何ぞや。今歲の春、吾二人此に在りて生死を同うせんことを誓ふ。海若も之を聞き、頑石も之を聞く。時たる未だ遠からず。海は枯れ

ず、石は爛れず。而して吾言は、已に消えて烏有に歸す。嗟吾夫、今年の春、此石上に在りき。今年の春、此石上に在りきと。其餘は乃ち更に語る能はずして、襟袖琳琅たり。

原文譯文、何れが優るやは、筆者も斷言し難いから、是れは讀者の比較を待つとして、要するに支那人が、文章に巧みな國民であることは爭へない。試みに支那と日本との新聞の社說を比較して見ても判る。議論の趣意は、別とするも、其文章の巧拙は殆んど比べものにならないのである。時としては支那人の書く新聞社說は、ドウして斯う巧いのかと、實に案を拍つて奇を叫ぶ場合がないでもない。殊に長い間、支那新聞の社說に與さはり、今日までも時々論文を發表する梁啓超氏の如きは、實に極東に於ける文章上の奇才だと思はれるのである。

支那人が、斯樣に文章の長技を有するは、筆者の深く敬意を表する所ではあるが、併しながら、文章でも辭令でも、巧に過ぎると、自然に一種の弊を生じて來る。餘り

に舌が滑らかだと、ツイ舌の滑ることがあると同様、筆も餘りに達者だと、餘計な文句、心にもない文句が出て來ることがある。加之、技巧に熱するの餘り、技巧に拘はれ技巧に役使せられるは、一切の藝能に於て、免がるべからざる疾である、支那人も文章辭令が長所であるだけ、其邊の疾が存在して居るのは、爭はれないのである。

試みに、支那古來の名文なるものを通覽すると、其名文たることは、正に疑ひないのであるが、一字一句、筆者の誠意誠心から出て、毫厘の僞りのないものと思はれる文章は、イクツあるであらうか。諸葛孔明の前後出師表の如きは、例外ではあるが自分は文章の妙を感ずる以外に、當人の誠意誠心を認め得べき名文なるものに、餘り目に掛つたことがないのである。陳琳の『討曹操檄』は、名文中の名文と稱せられたもので、曹操も之を一讀して頭風が癒えたといふ程であるが、併しながら、彼は其後間もなく、曹操の捕虜になり、何故アンナものを書いたと詰問せられたとき、『矢弦上に在り、發せざるを得ず』と澄まして答へた位ゐであるから、素より筆を下すに當り

て嚴格なる理性、熱烈なる感情から、文思が湧出したものとは思へないのである要するに、支那人が文章に巧みな一方に、其文章に誠意誠心を伴はないこと、猶ほ彼等の辭令の如くなるは、最早や多言を費さずして明かである。

第九篇　迷信の深い事

迷信は何れの國にも存在する。自から文明國民と稱する歐米人の間にも、幾多の嗤ふべき迷信に拘はれる者が少なくない。彼等が十三の數を忌む如き、其最も著しい例である。筆者の少年時代にスペンサーのスタヂー　オヴ　ソシオロジーを讀んで、西洋人の迷信の意外に多いことに驚かされたが、其後段々と見聞を擴めるに隨ひて、彼等の迷信の分量が、日本人と餘りに相違のないことを確めるに至つた。此點から見ると迷信は世界共通のことゝ思はれるが、併しながら、國により民族によりて、其程度に幾通りもの差等がある。此差等が文明未開の區別を立てる常識的標準となるのである。

支那人も、氣の毒ながら、迷信の程度に於て尙ほ未開の域を脱しない國民と云はねばならぬ。固より筆者は、彼國に於ける中流以上の社會が、此十年內外の間に、著しい進歩を遂げたことを認めるものである。隨つて此等の社會に於ける迷信の程度も、大に減少したことを推測すると同時に、中流以下にも多少その影響の及んだことを推測するものである。獨り推測する許りではなく、之を確かむべき一つの證據がある。筆者は豫てから支那の小說に、狐の人（殊に美人）に化ける話の非常に多いことを感じ（『聊齋志異』の類）支那に在ること三十餘年に及び支那通として第一人者たりし故某氏に對して、實際に狐の人を魅す話が、其れ程支那人の間に澤山行はれるかと質問したら、約二十年前までは斯樣な話が確に澤山あつた、其點は二三十年前までの日本の田舍よりも遙かにヒドかつたが、爾來段々と开んなことを耳にない樣になり、今日では狐に魅されたと云ふ話が、殆んど絕えて了つたとの答を得た。是を以て觀るも、支那人の迷信も此頃に及んで幾らか薄らいで來たことが認められるのである。

斯樣に彼等の迷信の薄らいだことが事實だとしても、其れは文明の風に吹かれる特

殊な地方のことだけで、一般には以前と大差のないことも、亦想像するに難くない。何せよアノ通りの宏大な國土のことであるから、三四千年來染み込んだ特別の迷信を二十年や三十年で全く蟬脱することは、迚も能きない相談であらう。其れで筆者は、支那人の或部分に於て迷信の薄らいだ事實を認めると同時に、古來の迷信が、概して尙ほ彼等の神經を支配して居ることを疑はず、此點をも所謂民族性の一特徴に加へて多少の說明を下さうと思ふ。

支那人の迷信として、最も顯著なものは、『風水』の說である。風水の淵源には、却々六かしい說があつて、遠く之を周代に求むる者もあり、又漢代に起るとする者もあるが、實際には、唐代に於ける『葬術』なるものが、其直接の先祖であつて、それが宋代以降に及んで大に盛んに爲り、『風水』の名も、此間に出來たやうである。

而して風水の內容は、山の位置や、形や水の流れや、或は樹木の生え具合ひなどを觀測して葬地を定めたり、都城や宮室の位地を決したりする一種の術であつて、此術

に隨ふときは、大は國家の安泰を保ち、小は一身一家及び其子々孫々の繁榮を來すと信じるのである。卽ち西洋のフイジオグラフイー（地相學）と、其濫觴が相似たものと想像せられる。併し風水も近代に及んでは、都城宮室の造營等には餘り應用せられず、寧ろ單に葬地を擇むの術になつて了つた譯けである。

風水によりて葬地を擇むの一事は、支那人の最も熱心、否熱狂せる所で、之が爲めには他の一切の利害をも、犧牲に供して惜まない。或は之が爲めに、大訴訟が起つたり、大爭鬪が起つたりするのである。過去二十餘年來、支那に於ける鐵道の敷設が盛んになつてから、其線路が或地域を橫ぎる爲め、其地域の風水を惡くし、折角其地域を擇んで墓地を拵らへた者が、大損害を受けることに爲つたといつて、苦情が持上ることもあれば、或は又鐵道線路の爲めに、一地方全般の風水を害することに爲つたといつて、一揆暴動を生じた例など、珍らしくない。又他の一例を擧げると、光緒帝や醇親王の父で、宣統帝の祖父たる故醇親王の死んだとき、北京城外の或地に葬つたが

其土地に墓所を設けた結果として、醇親王家は、三代に亙つて、天子を出だすことに爲つたといふ風水上の説が行はれ、其れが故西太后の耳に入つて、段々と詮議を遂げると、墓地の中に、一株の公孫樹があつて、是れが爲め、墓地の風水が、大變好いのだといふことが判り、太后は、大に妬忌の念を生じて、其木を切り倒させたと云ふ話がある。此話が事實だとすれば、其風水の説が、奇妙に適中して居る。即ち光緒、宣統の二帝が、醇親王家から出た許りでなく、現代の醇親王は、宣統帝の攝政として一時は事實上の天子になつたから、歸する所、三代の天子になる譯けなのである。

風水の信仰の甚だしい例を、小説中に求めると、左の如きものがある。

『堪輿』

（聊齋志異一節大意）

沂州の大家たる宋氏の家では、ヒドク堪輿（風水のこと）を尚ぶ家風であつて、婦人までも。之に關する書物を讀んで、其理を會得する程であつたが、主人の病死したとき、兩人の息が、其れ〴〵父の葬地の研究を始め、其術に委しいものとあれば、千里をも憚からず、遠方から招き寄

せて其所見を述べさせたので、此等の術士は毎日騎馬で、郊外に出で、風水の好い土地の詮索に忙はしく往來織るが如き有様になつた。斯くて一箇月餘りも經つてから、術士は其れ〴〵詮索の結果を報告に及んだ。然るに兩人の息の傭つた諸術士の選定した所が、双方齟齬するので、茲に兄弟間の衝突が起り双方各々、其目的とする土地に墓所を拵らへ、錦棚を張り、彩幢を樹てゝ父の柩を迎へんとした。斯くて、葬式の行列が出掛けて、愈々二箇所の墓地の何れへかへ、向はねばならぬといふ岐路に差掛ると、忽ち兄弟同志の大爭論が始まり、一家一門の誰彼れも、好む所によりて一方に味方し、喧嘩の火の手が、ます〴〵強くなつて、日の暮れるまで論が決らず、送葬の人々も、呆れて退散したが、迷惑なのは、柩を擔いだ人夫共で、幾人も入換つて、肩を換えながら待つて居ても、果しがつかず、終には憊れはてゝ、什にも能きないので、柩を路傍に卸して逃去つた。其れで兄弟の者も、據なく一先づ葬儀を中止し、大工を呼んで、柩を措いた場所へ假家を造らせて、風雨を蔽ふことにしたが、兄の方は、其傍に家屋を新築して何時までも柩の番をすると云ひ出すと、弟も負けて居らずに同じく新築を始めたので、一門中にも、之に倣ふ者を生じ、斯くて三年を經る間に郊外の原野に一つの新らしい村が出來て了つた。

斯様な譯で、双方負けず劣らず、意地を張り通す内に、兄弟とも、段々と老人になり、終に相繼いで病死したので、ソコデ始めて、嫂と娣とが和睦し、兩人で改めて墓所を取極めやうと相談し相携へて、當初兄弟の擇んだ土地を檢分すると、双方とも兩婦人の氣に入らないので、更に術士を喚んで選定を始めさせたが、元來此家の家風として、婦人までも風水のことに委しいから、術士の薦める土地は、容易なことで兩婦人の同意を得ないで、種々の批難が加へられ、術士も大に手古摺つたが、十日餘りも掛つた後、ヤツトのことで、始めて兩婦人の御裁可が下り、銘々の夫の柩は扨措き、舅の柩をば、何十年目かで、漸やく土中に葬むることが能きた。

風水のことは、先づ右の通りとして、更に宗教上の迷信を擧げるとなると、殆んど數へ切れない程の可笑な例がある。併しながら、牛鬼蛇神といふが如き動物の崇拜や山川草木を神と崇める事柄は、我國にも、未だ幾らかは存在するから、アンマリ支那の惡口は言はれない。只其程度に於て、彼國人の方が、餘程ヒドイのみならず、特に日本と違つて居る點は、其神様なるものが、災を攘ひ福を授けること許りを勤められ

ずにトンダ惡戯を爲されて、無暗に人間を泣かせることを樂みとせられる厄介な神様が、少くない一事である。勿論、日本でも恐ろしい荒神様の話もあるが、其れは遠き昔から傳はつた傳説に過ぎない。今では左様な神様は、鐘太鼓で搜したとて目付かりやうもないが、支那では、其れが珍らしくない。人に乘移つて、一村からの供物を强求し、其れを承知せぬと、旱魃にするなぞ威しつけるやら、何も知らぬ旅人が、拜禮をしなかつたと云つて、忽ち急病を起させたり、甚だしいのに爲ると、美しい女だと御目が留まると、人の娘であらうが、妻であらうが、お構ひなしに夜這に御坐る神様までである。斯様に淫祠邪神に屬する迷信が盛んだから、之に付け込んで、出鱈目の神様を擔ぎ出し、法外な金儲けをする山師のあるのは勿論、場合によると、一揆徒黨を起す種にする輩もある。是れで觀るも、支那人一般の風氣は、未だ一通りや二通りの努力では開發し盡せないことが、推諒せられるのである。ソシテ特別に滑稽なのは、福建省の或地方では、『西遊記』の主人公たる孫悟空を、神様と崇め奉つて居るとのこ

とである。此世に存在したことのある人物を、神様にするのならば兎も角も、全然架空の小説に描き出された無可有の動物を、神様扱ひとは、呆れた話で、往年東京の或新聞記者が、房州へ遊んだ記行に、富山を伏姫（八犬傳）の古跡と書き立てと、恰も好一對の奇談である。

又支那には、卜筮巫祝の類が、極端に多いが、玆に我舊幕時代に行はれた『口寄せ』の巫女に似た『扶乩』といふものがある。『口寄せ』と幾らか違ふのは、巫人に乘移る幽靈は、必らずしも依賴者の骨肉とか、友人とかでなくて、何所の何者かも知れぬ亡者の魂がヒョッコリ出て來るのである。ソシテ其亡者は、巫人の手に依つて先づ己れの身分來歷を暗示した詩などを書くのである。其文字によりて、依賴者は、ドンナ幽靈であるかを見當付け、扨て其れから、吉凶禍福などの判斷をして貰ふのであるが、巫人の方では、成るべく勿體をつける爲め、有名な英雄とか、學者とかの幽靈を持出す場合が往々ある。左に掲ぐる一例は、李太白の幽靈を持出し損ねた巫人の失敗談で

市立氷川図書館

ある。

『瀟陽續錄』　（一節大意）

乾隆壬午の年、余（著者）の門人が、一扶乩者を、余の邸に迎へて、下壇（幽靈の乘移り）を請ふたが、巫人は忽ち紙を展べて、左の二首の詩を書いた。

『沈香亭畔艷陽天　斗酒會題詩百篇
二八嬌嬈親捧硯　至今身帶御爐烟』

『滿城風葉薊門秋　五百年前感舊遊
偶與蓬萊仙子遇　相携便上酒家樓』

『其れでは、青蓮居士（李太白）か』と問ふと『左樣である』と答へた。此とき座に在りし趙某なる者、突然問を起して、『大仙の斗酒百篇は沈香亭での事跡ではありますまい。又楊貴妃が馬嵬で死んだとき三十八歳であつたとすれば、大仙が玄宗皇帝の御召に與かつた時には、僅かに二八の十六といふ年ではなかつたかと思はれます。又唐の天寶時代は、今を距ること五百年どころでなく、千年以上ではありませんか』と突込むと、例の巫人はテレ隱しの積りか『我醉欲眠』（太白の

詩句）の四字を書いた。其れから後は、イクラ質問をしても返事がなく、軈て太白の幽靈は、冥途の使に促がされて、巫人の身を離れ、巫人は匆々に暇を告げて立去つた。

古來、支那に於ける巫祝の勢力は、夥だしいもので啻に匹夫匹婦を欺いて、金穀を掠める許りでなく、國家の治亂泰否にも影響する場合が、甚た多く、寧ろ巫祝は、支那の歴史の一要素ともいふべき程である。其著しいものを擧げると、遠くは後漢の末鉅鹿の張角を首領として起れる黄巾の賊、近くは清朝の乾隆から嘉慶にかけて、徐鴻儒なるものゝ起せる白蓮教徒、更に最も近いのは、義和團事變の如き、何れも巫術を種に使つて、多數の迷信者を得た結果であつた。義和團が、其信徒に、一種の護符を授け此護符を身に着けて居ると鐵砲彈が中らないと稱した。之を信じた爲め彼等の兇焔ます〳〵熾んになり、終には公使館の包圍攻擊まで敢てしたことは、有名な話である。凡そ此種類の騒亂は、彼國の歴史に、幾通りも見受けられるのである。ソシテ今

後とても、迷信者を得るに巧みな巫祝が現はれゝば、當人の考と器量次第で、何時でも大なり小なり地方の動亂を企てることが能きる。其點に於て、今も昔も、大した變りはないのである。

斯樣に、巫祝に迷ふ者が多い結果として、色々な珍談がある。左に掲ぐる小説は、其一例である。ソシテ此小説の筋は、曲亭馬琴が『近世説美少年錄』中に飜案して居る。

『誇妙術丹客提金』

（今古奇觀一節大意）

松江に、潘某なる一富翁があつた。生來丹術（金を造る術で、西洋でも迷信者の間に流行つた煉金術と同じやうなものである。）を信じて、時々色々な山師に引掛かり、少なからぬ金を騙られながらも、少しも之を後悔せず、世の中には、必らず本當の丹術なるものが存在して居ると思ひ詰め、何時か一度は、其道の人に廻り遇ふことがあらうと、待ち設けて居た。潘翁は或るとき支那第一の好景たる杭州の西湖を見物に出掛けたが、宿屋の隣室に、泊り合せた人は、餘程の金

持ちと見え、一個の美しい妾を伴なひ、附添ひの婢僕も、多勢引連れ、日夜となく、船を西湖に泛べて、奇勝を捜り、贅澤な遊び方をして居るので、潘翁も其豪華を羨むと共に、其の美人に魂を褫はれて、朝暮目を着け居る内に、其の客人と何時しか心易くなり、遂には互に姓名を通じ合ふに至つたが、潘翁は、話の序に、其客人に向ひ『失禮ながら、貴方は餘程御富貴なお方とお見受け申します。扨うでなければ、斯様に事の足りた御旅行は、能きない筈だと思ひます』と問ひ掛けると、客人は『ナニ錢金といふものは、何んでもないもので、幾ら使つても、無くなる氣遣ひはありません』と答へた。潘翁は不思議な思ひをして『金を使つて無くならないとは、如何したことですか』『其れには自から法があります。其法を用ひさへすれば、使つても〳〵、金は無くなりません』『シテ又其法は、如何やうな法で御座いますか』と、膝乗出して問ひ掛けると、客人は『お望みとあれば、お話しても宜しい。併し他聞を憚りますから』と、左右を遠ざけて、聲打潜めて語るを聽けば、此客人こそ、潘翁が日頃憧憬れて居る丹術の名人で、其れが爲め、斯様な贅澤な遊びも能きるのであることが判つた。扨てこの丹客（丹術者のこと）は、其説明をすると共に、潘翁の目前で、錬金の試驗をして見せ、水銀が正しく金に化けることを、明かにしたの

で潘翁は大喜びで『是非拙宅へお越しを願ひたい』と、拜まん許りに願ひ立て、遂に丹客の一行を松江へ伴ひ歸つて、儂家に寐泊りさせ大仕掛の煉金を行なつて貰ふことに爲つた。

そこで、丹客の道ふには。多分の金を得やうと思へば、先づ親金が必要である。其親金が多ければ多いほど、水銀の金に化する割合も、大きくなるとのことであるから、慾に目が眛んだ潘翁は親金として、早速二千金を差出した。丹客は之を受取りて、煉丹の爐を造り、金と水銀とを、其爐中に藏め、八十一日目に、水銀の全部が金に化する筈である、ソシテ九日目ごとに、火の加減を見ねばならぬと申聞かせた。潘翁は益々喜こび、心を籠めて、丹客と其妾とを款待して居る内に二十日あまりも過ぎた頃、丹客の鄕里からの使だといふ者が來て、丹客の母親が病死したとの通知を齎らした。丹客は大に哀慟して直ちに鄕里に歸ることに爲つたが、其出發に臨みて、潘翁に向ひ『已むを得ない次第で、煉金の仕事最中に、お暇を願ふ譯けであるが、拙者の代りに、火加減を見る者がなくて、誠に困り果てる。尤も拙妾を留めて置けば、代役は勤まる譯けだが、如何したもので御座いませうか』と問ひかけた。豫てから丹客の妾に思ひを焦がして居る潘翁は、得たり賢こし『是非左様にお願ひ致したい』と、懇願したので、丹客は終に妾を殘し、葬事の

果てた後は、相違なく罷り出ると約束して立去つた。

其以來、丹客の姿は、專ぱら爐のことに注意する風であつたが、或日了頭を潘翁の室へ遣はし爐の火を見るのに、立會つて貰ひたいと申入れた。潘翁は、早速婦人の室へ訪づれると、軈て盛裝を凝らして立現はれ、潘翁を爐のある室へと、先立ちて案内した。其姿を、後から熟々と眺めると、愛慕の情がます〳〵加はり、愈〻爐の前に來て、何角と立働らく態を見ると、殆ほど堪へられない心がして、肝腎の煉金のことなどは、打忘れた程であつた。

其れで潘翁は、丹客の歸つて來ぬ間に、如何にかにして、思ひを遂げやうと、色々に目算を廻らした揚句、爐の火を焚いて居る小童に、酒を飲ませて段々と之を手に入れ、或日婦人が爐前に在るとき小童を外に誘ひ出し、己れ一個室内に入込み、婦人と差向ひになつて、思ひの丈けを訴へ始めた。婦人は最初は、潘翁の無禮な擧動に、打腹立てた風を見せたが、遂に何時しか心も折れた様して、潘翁の言ふが儘になつた。

潘翁は、思ひの叶つたのに有頂天となり、其れより十幾日の間、媾曳を累ねて居たが、或日突然丹客が歸つて來た。挨拶の事了り、何喰はぬ顏で、兩人のものは、爐前に案内したが、丹客は

左右を有散臭さうに見廻して、室内の氣色に、何となく怪しむべきものがある、心掛りなのは爐前の様子だと急ぎ手づから、爐を開くと、アツト許りに仰天したさまで『これは大變。術が破れた。而かも親金まで失なつた』と叫び立て、『必定此室内で、不淨の行ひをした者があるに相違ない』とて、潘翁と婦人とを睨めながら、小童等を呼寄せて、樣々と詰問した末、矢庭に棒追取つて、婦人を叩かうとした。最前より色を變へて打顫へて居た潘翁は、此體を見るに忍びず、平身低頭して、己れの心得違ひを謝し始めた。丹客はます〳〵打腹立て、散々に潘翁を毒突きながら爐中の二千金を騙つた上に、謝罪金として三百金を奪ひ取り、妾や伴の者を引連れて、何處ともなく立去つた。

卽ち迷信を利用した詐僞と美人局とである。之に類似した詐僞は、支那の小說類に幾通りも記されて居る。

迷信と、普通の宗教的信仰とは、其境界線を識別することは六かしいけれども、併しながら之を全く相混同せしめてはならぬ。其れで支那人の迷信を述べる場合に、彼

等の佛教道教等に對する信仰心を批評するは、當を得たものとは言はれないが、便宜上之に言及することを許して貰ひたい。

世人或は、支那人の德心の衰頽に徵し、又寺院の荒廢、及び僧侶の無學野卑を目擊して、彼等の間に於ける宗教心は、既に滅びて了つたかの如く思惟する者が多い。其れで、大正四年の日支交渉の案件中、第五項に屬する佛教宣布權獲得の要求が、最後に及んで撤回せられたるに就ても、一般に之を冷淡に看過し、其撤回に不平を鳴らした者は甚だ少なかつたが、是れは支那人の宗教心に關する、實際の狀況を明かにせず又西洋の宣教師の、支那に於て收めつゝある精神的並に物質的効果、甚だ偉大なるものあるを詳かにしない誤りだと云はねばならぬ。實際、支那人は、迷信も深いには深いが、佛教道教等に對する信仰心も、亦決して淺いとは云はれぬ。山間僻地はイザ知らず、市府都會の地に於ける寺觀の參詣人の多いこと、香煙の脈々として、朝夕不斷なること、普陀落山や五臺山などへ參詣進香する爲め、遠方から群を成して旅行する

者の多いこと、僧侶道士は無學野卑とは言ひながら、持戒の堅固な者が案外多く、此點に於て我國の宗教家を慚愧せしむるものあること等は、何れも支那人の宗教心の、未だ地に墜ちざる證據である。

斯樣に宗教に對する感受性（サセプチビリチー）の深いことは、筆者をして支那人の將來に、尙ほ多少の望を屬せしめる一理由である。今日の支那人中には、相當に物の判つた人物もあるが彼等を全般的に觀れば、實の所、殆んど手も着けられない程に墮落しつゝあると云つても、決して過言でない。其墮落を拯ふ爲めには、佛教なり基督教なり、健全な宗教心を瀰蔓させることが、最も手近い手段であつて、之に賴り公私の德心を涵養することをば彼國の急務だとせねばならぬ。殊に支那人の赤化に對する對症療法としても、之が有効な手段であつて、其點は西洋に於ける過激思想對宗教心の關係から推斷することが能きるのである。

第十篇　享樂に耽り淫風盛なる事

支那人が、上流下流を通じて、享樂的慾望の強いこと、並びに其慾望の最も著るしい點が性慾に存ずることは、第四篇にも一言したことであるが、之に關しては、更に委しく説明せねばならぬ。

米國のサンガー氏の『賣笑史』(ヒストリー オヴ プロスチチユーション)にも『支那人は、世界に於ける最も淫蕩な國民の一つである』と記してある通り、彼等の性慾の深いことは實に世界的定評である。其最も覩易い證據は、彼等の食事の材料及び料理法の多くが、性慾上の目的の下に取捨選擇せらるゝの一事である。ウイリヤムス氏の名著『中國』(ミッドル エンパイヤ)にも

『此多情なる國民は、食物の原料を求めるに當りても、多くは其想像せる性慾的効能を目標とし

て居る。國外より輸入せられる特殊産物の最多數は、右の効能を含むと認められた物である。(此間に燕窩等に關する説明があれども之を省畧する)大宴會に於ける數多き獻立の大部分は、或特殊の强壯劑的性質を含むと想像せられる奇妙な原料から成り立つて居る。』

とあるが、是れは多少彼等の社會に通ずる者の首肯する所である。

元來支那料理の特徴は、殆んど總てを通じて、氣味の濃厚な點であるが、其原因は單に氣候の關係とか、又は傳來的習慣とかに歸すべきものではなくて、主として前掲の目的から考へ付いたものだと認められる。斯樣に認められる理由は、第一には支那人の淫蕩的民族性、第二には彼等自から食物の此特殊的性質をば明白に敏感に意識して居る事實に存ずるのである。

此點に就て、更に具體的に若干の例を擧げると左の通りである。

(一)　魚鳥肉の内臓(雜物)や、魚の鰭など、普通の料理では、殘滓として取捨てられる物をば、却て餘計に珍重し、之を主要なる料理の原料とする。是れは第五篇に

於て支那人の儉約を示す一例にも引いたのであるか、其主要目的は、矢張り强精補腎に在るのだ。動物の内臓に、此目的に副ふもの或は刺戟性のものが多いことは、動かす可からざる事實で、ホルモンの如きも亦之に屬する。

（二）桂花を交ふる料理が多く、假令ひ眞實それを交へなくても、其名を冠するものが少くない。桂花は矢張り例の効能があるとせられて居る。此効能を目的とする藥劑にも、殆んど悉く之を調合してある。彼國の娼樓にも、其鉢植や挿花を見受けることが多いとのことである。

（三）支那料理に鰕を用ふることが甚だ多い。是れは我國に於ける支那料理店でも誰しも氣の付く所であらう。鰕が食料として最も性的効果に富むことは、彼國人の夙に信ずる所であつて、嘗て我外國語學校の傭敎師たりし某支那人も之を切言したことがある。

（四）筍と支那人との關係も、亦丁度、鰕と同一である。彼國人の筍好きなことは

日本人以上と謂へやう、（孟宗の故事も思ひ合はされる）可笑な話だが、或は其挺然たり翹然たる姿勢から想像が導かれたのかも知れない。

（五）支那料理の總てを通じて、何等かの香料（スパイス）の應用されないものはない。香料の刺戟的作用は、支那ならざるも、之を知るに苦まないであらう。

（六）蜜餞果物（果物を長く保存すると共に、糖分をヨリ多く發揮させる爲めとして、蜂蜜で煮詰めたもの）の多いことも、此點に於ける一特徴である。蜂蜜は興奮劑强壯劑として、古來支那人は勿論、我國人の間にも信ぜられた所である。

（七）支那人の阿片に耽るのも、其目的は、單に快眠を貪ぼる爲めのみでなく、主として性慾的刺戟を受ける爲めである。相公（孌童）を相手の情事を敍した小說『品花寶鑑』（一名『怡情逸史』）などにも、其邊の實際的光景を敍した部分が多い。所ろが此目的の下に、阿片を料理に應用したものも亦少くない。『芙蓉』（阿片）の名を冠する料理は、支那人の最も悦ぶ所である。尙ほ序ながら、支那人には大酒の癖のある者が

割合に少い。是れは性慾上の障碍を怖れる爲めだと云ふことだが、其理め合せに（反對の性質を有する）阿片の愛用が彼等の醫すべからざる痼疾となつたのも、奇な因緣である。

斯樣に支那料理の原料と料理法とが、强精補腎を主要な目的とするの事實は、如何に彼等の斯道に熱心なるかを證明するものであるが、此外矢張り同じ目的の藥劑に就て、彼等の研究の極めて熱中的であることも、亦顯著な事實である。（勿論迷信的なものも多い）支那では道家（道敎の信仰者）の一派として、『房中家』なるものを存じ、性的衛生に關する一種の研究が行はれ、其研究を述べた書物も可なり多いが、此等の書物の中でも、有名な『素女妙論』『玉房秘訣』『玉房指要』『洞玄子』『探戰春方』『三峰採戰』等には、此關係の藥方が、却々澤山に掲載せられて居る。其藥方の材料としても滿更らでもないものが、少なからず發見せられるのである。又支那の新聞の廣告などにも、久しい前から斯樣な賣藥が盛んに出て居る。舶來品として『自來血』（ヘモグロ

ビン）とか、『紅色補血丸』（ピンク ピルス）とかは、一時非常の勢ひで、廣告欄を賑はし、輸入額も非常なものであつたさうだが、近來は名前など之に紛らはしい所謂國貨が大に跋扈して居る。其點は我國近年の流行に係るホルモン製劑と略ぼ似通つたものである。

扨て支那人は、食事と藥とに於て、右の通り性的欲求を充たすの念に滿ちて居るが是れは抑も遠き古代からの習俗であるやうに見受けられる。前にも述べた通り支那の人心を最も有力に支配せる道敎の思想なるものは、歸する所、人をして延命長壽福澤快樂を十二分に享受せしめやうとする享樂主義であるが、更に一歩進んだ理想は、人間を仙人にするに在る。所ろが此仙人には三種類ある。第一には天上に飛昇する天仙第二は不老不死の地仙、第三は完全なる壽康を保ち、飽くまでも現世の快樂を享受し得る尸解仙である。道家の手近な理想は、勿論この第三者であるが、その現世の快樂の直中（なか）とし圖星（つぼし）とする所は、卽ち性的快樂に外ならぬ。此快樂を全うするの道としては、常

に特殊の靈丹を服用し、且つ房裏の技能に熟達し、或は徹宵數人を御して倦まず、或は身體の一部を、特に發育增大せしめる等、所謂强陽、採補、久戰の術に通ずるのである。

斯樣な靈丹房術は、理想的な境地に達しないまでも（仙人にならないまでも）或程度までは、普通の人間も之を求め得ると信ぜられて居るから、古來富貴な者が、道士から其傳授を受けるに焦心した事實が甚だ多い。隨つて之を看板にして人を欺く道士も亦甚だ多い。秦の始皇が徐福をして不老不死の藥を求めしめ、漢の武帝が承露盤を造つたりした事跡も、單に延命長壽の爲め許りでなく、亦性的慾望をも併せたものと想像せられる。

小說に現れた所でも、『覺悟憚』の未央生、『杏花天』の封悅生、『牡丹奇緣全傳』の魏玉卿などが、道士や僧侶から、藥を受け術を受けて、到る所に女を迷はせ、色男の相場を狂はせた話が、總て同一轍になつて居る。又『野叟曝言』といふ小說は、王陽明が寧王宸濠を誅した事跡を骨子としたものであるが、主人公たる朱文白即ち王陽明は

逆賊を退治する手段の一として、徹宵不憊の大腎藥を利用することに爲つて居る。此等の小說は、大意なりとも之を述べるに憚かるから、一切省略し、只隋の煬帝が荒淫の極、精力の衰へたのに煩悶し、種々の方法で回復を謀つた話の大要を擧げやう。

『煬帝艷史』

（數節大意）

隋の煬帝は、登極の後、父文帝の寵妃宣華夫人を幸ひしたのを手始めに、一生を通じて有らん限りの淫虐を恣まにしたが、餘りに度を過ごしたので、年未だ老けざるに、早くも精力疲憊し、三千の粉黛を眼前に控へながら、思ふがまゝの樂みを貪ぼることが能きなくなつた。其れで畫院の官吏に命じて、無數の春宮圖を作らせ、其れを宮中到る所に揭げさせ、幼女（當時煬帝は、特に十二三歲から十四五歲の幼女を寵愛して居た。是れも病的變態的になつた爲めであらう）を引俱しては、其れから其れと眺め步き、之を以て精神を興奮させるの手段としたが、割合に効能が現れぬので、人を各地に遣はして、巧妙な春宮圖を尋ね求めさせた。

其頃恰かも烏銅屛なるものを献上した者があつた。其れは全部銅鏡で出來た屛風であつて、都

合三十六枚より成り、一枚ごとに高さ五尺、幅三尺で、白石を臺座とし、兩面とも十分に磨き上げられて、玲瓏透徹、微塵も洩らさず映し出で、之を排くと、眞に玻璃世界白玉乾坤も啻ならぬ有樣だから、煬帝は大に喜び、其屏風を取廻はした中へ、寵愛の美人幼女を集め、自他ともに寸縷を掛けずに戯むる〻其風情の屏風に映るを看て、更に情興を刺戟するの種とした。

又或日、美人幼女等を召連れ、香車に乘じて宮外に遊幸したとき、護衛の軍士が車駕を避けなかつた不敬漢だとて、一人の道士を引立て〻來た。煬帝は親しく道士を鞫問した末、其方は何の用向があつて、都へ出て來たのかと問ふと、『世人淫を貪ぼり、色を好み、自ら性命を送る（天死する）を見るに由りてなり。俺、道人、山中に在りて事なし。偶ま百花を採りて、一種の丹藥を合了し、世人を救度せんと要す。故に此來に歩に信せて來る賣るなり』と答奏した。『什んな効能があるのか』と問ふと、『精を固うするに最も妙なり』と稱した。煬帝は內心滿悅で、『左樣な藥ならば賣るには及はぬ。朕の手許へ獻上するが宜しい。若しも言葉通りの効能があつたならば、輕からぬ褒美を取らせるであらう』と申渡すと、軈て道士は、小さな瓢簞から、十粒ほどの丸藥を取出し、近侍の手を經て、獻上に及んだ。煬帝は之を看ると、僅か米粒くらゐのものに過ぎないの

で、『恁般に小さくて、僅かばかりなもので、什麼して精を固めることが能きやうか』と笑ふと、道士は『それは金丹でございますから、一粒づ〻御用ひになれば澤山でございます。御用ひ濟みの上は、又別に差上げるでございませう』と答へ、己れの宿所をも申上げて退出した。

扨て煬帝は半信半疑で、那丸藥を試みると、『一霎時にして、精神煥發、春興勃々（中略）精神陛長、平日に比して、何ぞ止に强壯百倍のみならんや』といふ狀態になつたので、先づ之を吳絳仙に應用したが、吳は遂に其狂逞に敵せず、袁寶兒、杳娘、妥娘、朱貴兒等以下十數人の美人、更る〻御用に進んだが、煬帝の焰威毫も衰へず。更に幾人かの幼女をも刻薄したが、最後に韓俊娥を召した後、漸くにして銳鋒を收むるに至つた。斯くて藥の在る限り、煬帝は此頃に似合はぬ强壯さ加減を見せたが、藥が盡きると、又元の杢阿彌になつて了つた。其れで那道士の宿所へ勅使を立てたが、影も形も留めなかつた。煬帝は大に失望し、臣下に命じて、普ねく丹藥を搜させたら、サア來るワ〻〻、仙人と稱し道士と名乘る如何はしい人物が、我も〻〻と所謂丹藥を携へて賣付けに來るのを、固より差別の付かう筈もないから、片端から御買上げになつて、毎日のやうに煬帝の口腹へ收まつたが、何れも其場かぎりの刺戟藥に過ぎないから、幾らかの効はあつ

ても其れが永續きしない上に、遂にはヒドク逆上を來し、口が乾て舌が燥き、齒が裂み、唇が焦げ胸の中が燒けるやうな心地となり、矢鱈と水を飲んでは、僅かに苦しみを嘗して居た。

是れは丹藥却つて害をなした例ではあるが、支那人にとつては、斯樣なものこそ、千鎰にも換え難き理想的寶物だと思はれる。

支那人一般に、性慾が格段に深いから、之に原づく各種の敗德汗行が多いのも、當然な成行である。或は『男女七歳にして席を同うせず』と儒敎にも敎へてある程で、男女の別を立てること極めて嚴格に見へるが、其れはホンノ表向きに止まる。家庭内で男女の居室を別けて、男子は夫婦關係に非ざるかぎり、婦人の居室に入ることの禁ぜられるのは事實ではあるが、併し其れが確實に勵行されるのではない。加之、居室の區別は、却つて餘計に不道德を釀すことがある。

其理由の(一)は、日本でも其弊のある通り婦人が平生男子と隔離せられるときは、

男子を餘りに物珍らしく思ふやうになり、又十分に之を理解し得ないので、偶ま男子と接近すると其誘惑に抵抗するの力が乏しい。(二)是れも我國に見る所ではあるが、婦人を交へぬ男子の會合に於ける談話が、兎角猥雜卑陋に流れると同樣、婦人同志だけの席では、案外に大膽な會話が交換せられ、一人でも男を交ぜると、迚も口に出せないやうな談柄を臆面もなく喋りあふことが少くない。其れで支那の婦人が閨房に閉ぢ籠り、同性だけで話を交す場合には、斯樣な風が最も多く現れて、自然餘計に懷春的傾向を生ずるのである。(三)閨房へ男子を容れない習慣は、自づと閨房中の秘密を保ち易いことになるから、支那の婦人には、此習慣を濫用して、亂暴極まる所行を敢てすることがある。老女江島と生島新五郎との話に似た罪惡は、支那では珍らしくないやうだ。

此(三)の事實を筋にした戀愛談は、彼國の小說で、可なり多く見受けられる所であるが、其中でも、烏渡目先きの變つたものを擧げて見やう。

『香菜根喬粧姦命婦』

（『歡喜寃家』一節大意）

張英といふ進士が、福建省泉州府の地方官から北京の兵科給事に轉任して程なく、夫人を喪つたが、又も程なく陝西巡按に轉任したので、赴任の途次、故郷の江西省南昌府に立寄つて後妻を娶つた上、自宅に留守させることにした。所が、張英は後妻に絶色の美人を得やうとの心があるので、熟〻考へるには、江西は何分美人に乏しい土地だから、其本場である江蘇省の楊州で、思ふ様な美人を目付け、故郷へ連れ歸ることにすれば可からうとて、其爲め態〻楊州に逗留なし熱心に物色した末、遂に莫監生の娘で、夙に國色の譽れある今年十八の處女を手に入れ、早速其土地で婚禮の式を濟ませて、故郷へ伴ひ歸り、軈て日數も經たざるに、新妻を家に殘して陝西に赴任した。

夫人莫氏は、馴れない土地で、空閨を守ることになつたが、何分にも物寂しさや退屈さに堪へないので、侍女の愛蓮と云ふを召し連れて、土地の名所など遊覽しやうとして、先づ華嚴寺と云ふ寺へ參詣した。

茲に又華嚴寺に下宿して居る廣東生れの寶石商で丘繼修といふ若者があつた。年は二十あまり

で女に擬ふ許な美男子だから、鄉里の廣東でも、數多くの婦人に持て囃され、『香菜根』といふ渾名まで付けられた。其れは色白で美しくて旨しいとの意味ださうな。扨て莫夫人が此寺に參詣したとき、繼修は圖らずも其姿を垣間見て、餘りの美しさに、忽ち魂を褫はれ、夫人の歸邸を跟け行きて、其身分を知つたので、如何にもして芳澤に接したいと、色々と工夫を凝らした。その揚句女の姿に身を裝ひ、矢張り寶石を商ふ振して、張家に入り込んだ。夫人の眼の前へ商ひの品かずを並べて居る內に、態と手を滑らせて澤山の寶石を床の上へ散亂させた。夫人は驚き、侍女と共に繼修に手傳つて、三十餘りは拾ひ集めたが、此とき日は暮れて、思ふやうに捜せなかつた。繼修の道ふには、『未だ半分ばかり何所かに殘つて居る筈でございますが、暗くて判りませぬから、明朝改めて伺つて、捜すことに致しませう』とあつたが、併しながら夫人の方では、貴重な品を其儘にして歸らせる譯にはならぬ。『明朝捜しても矢張り數が足りないと、お前さんも、內の侍女を自然疑ひたくもならうし、妾も心持が惡いから、一層のこと、お前さんが今夜中、此家へ泊つて居ることにしてはどうでせうかネ』との夫人の言葉に、繼修は思ふ坪と滿悅して、遂に張家へ泊り込むことになつた。『デハ此所で晩飯を喰べることにしなさい。ソシテ愛蓮ヤ、お前が餘り此

部屋へ出入りすると、ツヒ珠を蹈みつけたり蹴飛ばしたりすることになるから、膳を運んだ後はモウ此部屋へは遠慮するが可いヨ。妾だけで御相伴をするから』と、夫人が故さらに侍女を遠ざけたのも繼修に取つては、益〻思ふ坪であつた。

斯くて繼修は、夫人と差向ひで、聊かばかり酒酌み交す間に、出鱈目な身の上話を足掛りにして段々と猥らな話に移り、自然夫人の心を動かした揚句、男とは露知らぬを好い事にして、同じ寢室に打臥した。

恁んな成行で兩人の關係が結ばれ、繼修は翌朝一先づ寺へ歸つて、坊主どもへは、歸國することに爲つたからと僞はつて、荷物は其まゝ寺へ預け、己れは再び張家へ入り込み、夫人の部屋〻同棲することゝなつた。

幸ひに閨房へ出入する者は、愛蓮だけであつたから、邸内の者どもは、少しも此秘密を知らなかつたが、程たちて夫の張英が任地から歸宅したので、繼修は其れに先だちて、此家を遁れ去つた。併し秘密は、圖らずも愛蓮の口から漏れたので、張英は、家の恥辱を掩ひながら、奸夫奸婦を十分に制裁しやうと工夫を凝らした末、巧みな手段で、夫人と愛蓮とを殺害し、又繼修をば

罪に陷れて、死刑を受けさせた。左れど此第二の秘密も、遽て暴露して張英自身も亦法の制裁を免れ得なかつた。

家庭内に於ける男女の別、却て風俗を紊すの源となることは、凡そ右の通りであるが、此外にも(一)父子兄弟竈を分たず、大家族を成して、一つ棟の下に群居するが爲め、(二)家族中の尊屬の威光が、法外に強い爲めに、舅と嫁と、兄弟と嫂娣との間なぞに極めて亂倫な行ひが出來易い。『歡喜寃家』の中、『李月仙割愛救親夫』の一節は、李月仙といふ美人が、夫の不在中、義弟に當る章必英といふ美少年の寢姿を看て煩惱を起し、遂に之と私通する筋を描いたものだが、彼女の煩惱の最中に

『想一想すらく、叔(義弟)嫂、情を通ずるは、世間儘有り、便ち他と一會兒を偷むとも、料るに人に知道せらるゝこと沒からん』(直譯)

と獨語ちたのは、風俗上の弱點を見せたものと思はれる。更に極端な例を小説中に求

めると、左の通りである。

『痴婆子傳』

（全篇大意）

姓は上官、名は阿娜なる女、十二三歳の頃から、既に春を知り初め、從弟の慧敏なる者と、子供同志で密通の眞似事をしたが、十七八になつてから、父が男色の相手をする俊といふ者とも慇懃を通じた。其後、間もなく、欒氏の次男に當る克傭に嫁したが、夫の他郡に遊學した留守中、閨寂しさの餘り、盈郎といふ僕を寵愛し、屢ば密會を重ねて居る内、大徒といふ僕に現場を見付けられ、口留めの爲め、是非もなく大徒に身を汚されたが、又もや其現場をば、夫の兄なる克奢に押へられて、終に義兄と義妹との關係が成り立つた。其頃舅の欒翁は、長男克奢の不在の折を機會に其嫁なる沙氏を犯して居たが、阿娜自身も、亦軈て舅の犠牲となつて了つた。其とき沙氏は阿娜に向ひて、『翁は是れ至親なり。今ま身を以て之に奉ず。孝たるを失はず』と說いた。斯樣に舅に對して一種の孝行を心掛ける間にも盈郎との醜交は續けて居たが、或日姑の病氣の本復を祈る爲めとて、盈郎を伴に連れて、卽空寺といふへ參詣し、寺僧の如海なる者に口說かれて其心に隨つた後で、加海師父の爲めにも均霑された。

其後、夫の弟なる克饕なる者、未だ獨身であつたが、嫂の不身持を嗅ぎ付け、之を種に迫つて來たので、其れにも肌を許した。其れから又己れの妹の緣づいた費某なる者とも、垣を踰える間柄と爲つたが、欒翁の眉壽の賀宴のとき傭ひ入れた俳優の中で、香蟾といふ女型が、大層美くしいのに心を惹かれて、又もや之とも私通した。其後數年が間は、新らしい男も出來ず、只是れまでの關係者と嬉戯を繰返すのみであつたが、其間に子が生れて、段々と成長したので、家庭敎師として谷德音なる者を傭ひ入れた。其頃は阿娜の齡も、最早や三十路を越えて、色稍や衰へはしたが、二十歳ころに較べると、慾念は却つて彌〻急となり、終に德音とも奸通した。然るに此德音なる者、主夫人の寵を受けるに付け込んで、色々と衣食の贅澤を並べ出したので、大きに困らせられる事もあつた。搗て加へて、長らく阿娜に可愛がられた僕の盈郎が、近頃あまり奥さまの御用のないのを恨に思ひ、同じ僕の大徒と言ひ合せて、德音のことを惡しざまに觸れ散らした。又義弟の克饕も、舅の欒翁も、阿娜の素振の情ないのを不平に思つた矢先き、德音の一件を耳にしたので、ヒドク腹を立てた。妹婿の費某も、舊好を溫めやうとして刎ねつけられたので、是れも不平黨の一人になつた。會ま阿娜の幼年のとき、始めて共に人事を解した慧敏が尋ねて來たの

で、德音と燒餅喧嘩が始まり、益〻醜聲が高くなつた。鬼角する内に、夫の克儒が、慧敏や父から、妻の不仕鱈を聽き取つたので、愈よ事が破裂し、德音は一家中の人々に袋叩きにされて逐ひ出され、阿娜は離緣になつて、生家に還されたので、始めて漸く夢の覺めた心地になり熟〻と思ひ廻せば、夫の外に、肌身を許した男の數が十二人もある、其罪は迚も贖なうの道がない此上は一生持戒し、三寶を禮して身を終らうと決心なし、其後卽空寺の如海が再び誘惑しやうと掛つたのを、此度は辛妙に拒絶し、爾來七十歳の今日まで、堅固に暮して居る。（との身上話を著者に語つたといふ自敍體の小說である。自敍體の小說は、支那でも近頃は澤山あるが、約二百年前に作られた此小說は、自敍體としては、元祖であらう。）

是れは固より極端な話ではあるが、支那人の家庭には、多少之に似た事實が、可なり多いと云ふことである。袁世凱なども、青年時代に、三番目の兄の後家と奸通して一たびは我家から勘當せられたと云ふ話も傳はつて居る。又民國時代になつてから出版された小說めいたもの（例へば『中國黑幕之黑幕』）にも、類似の話が少なからず出

て居る。

支那人が妾を蓄へる弊風は、極端に走つて居る。固より蓄妾は東洋の通弊で、土耳古其他の回教國から、印度にかけて、上流社會には一向珍らしからぬことである。（此場合は『蓄妾』なる言葉に廣き意味を含ませ、回教徒の多妻制をも代表させてある）日本人にも其弊が澤山ある。併し資產の餘り裕かでない者が妾を蓄へる點に於ては、支那人は、回教民族中の若干と共に、特に群を拔いて居る。況して上流社會に至りては日本人などのやうに一人二人を內所で圍ふとは違つて、五人六人或は其以上に際限がないのみか、其れを些かも外聞の惡いことと思はず、寧ろ自慢の種にする。妾を第二夫人第三夫人などゝ稱して平氣で居る點から見れば、支那をば回教國と同樣、多妻制の國とも認め得られる。立派な良家の娘が、他の第二夫人たるに甘んずるの事實は、益〻之を裏書きすることに爲る。モウ可なり古いことだが、日淸戰爭のとき彼艦隊の司令長官であつた丁汝昌の妹は、李鴻章の第二夫人であつたさうな。

斯樣な譯だから、日本へ來て居る支那の留學生が女狂ひに浮身を窶すは愚か、學生の癖に妾を拵らへて收まつて居る者などあるのも無理はない。今から十餘年前、上海で出版せられ、其後支那政府から發賣禁止を命ぜられた『留東外史』といふ著者不明の小說がある。(何海鳴の作だとも云ふ)概して事實を述べたものらしく、主として日本人の性的不道德を意地惡く書き立てることを目的としてある(下田歌子さんなども引合ひに出されて居る)が、併し全篇を通讀すると、其れが日本人攻擊よりも、寧ろ我れ知らず、支那留學生自らの不品行をば、態々骨を折つて白狀した部分の方が多くなつて居るのは滑稽である。

小說より見たる支那民族性　大尾

1439
14
27818
市立氷川図書館
氷川図書館
昭5.2.22

◇小說から見た支那民族性◇

大正十五年四月七日印刷
大正十五年四月十日發行

定價金壹圓貳拾錢

著者　安岡秀夫

發行者　足立欽一
東京市四谷區新宿一ノ八五

印刷者　中川二郎
東京市京橋區新榮町五ノ二

發行所　東京市四谷區新宿一丁目八十五番地
電話特長四谷五十一番
振替東京五六一四七番
聚芳閣